翼のある人

母離　桜子

「真理がわれらを自由にする」

一　プロローグ

ぼくがこの小さな町に来たのは、小学校三年生の春だ。父の転勤で、初めて、転校生というものを経験した。あれから、八年が過ぎた。

今、ぼくたちは、町の高校から歩いて二十分ほどの小高い場所にある、ラベンダー畑図書館に向っている。図書館のインターンシップを二日間、こなさなければならないからだ。高校の進路担当の先生には、「あいさつと返事はハッキリとしろよ、二年生なんだぞ」と念を押され、送り出された。

ぼくの後ろから、同級生のサトルとミワが、めんどうくさそうな足取りでくっついてくる。ぼくが先頭を歩くのは、別にリーダーと決まっているからではない。何かいやな予感がする。

「カイ、少し早すぎないか」と、後ろからサトル。

「十時、開館なんだけど、九時過ぎには職員さんや館長さんも来ているらしい」と、ぼくが答えると、ミワもうなずく。彼女が電話でアポイントを取ったのだ。

三人とも学校指定の水色地に白い線の入ったジャージだ。図書館では、動きやすい格好でと言われたためだ。七月初めのころの朝は、里山の緑が運ぶ風が、さわやかな香りの炭酸水のようで気持ちいい。

図書館は、小高い丸山の中腹にある公園の中にある。その図書館の屋根が見え始めた。教室で勉強よりましかと思い、足を速める。

「おはようございまーす」示し合わせたわけではないが、三人で合唱した。まだ準備中のためか、薄暗い館内からはなにも返事がない。

いや、人の気配もないようだ。入口の自動ドアはすでに開け放されているというのに。ほのかに優しい香りがする。多分、ここの館長さんが育てているラベンダーのせいだろう。ぼくは、この図書館にある数学者の宇沢弘文さんの本を愛読しており、時々、借りにくるので、少しだけ様子を知っている。

図書館は、全体が平屋であるが、視聴覚室とセミナー室のみ二階となっている。ボランティア室は、一階の入口横にあり、休憩室も兼ねているので、飲食ができる。コンビニはあるものの、ファストフード店などない、小さな町にとって、高校生のまたとない情報交換の場だ。

図書館の入口は、吹き抜けになっており、展示ボード、新刊コーナー、当日の返却本を展示している書棚、小展示台など小さな町の図書館のわりに工夫されている。一階のワンフロアー全体に書棚が置かれていて、窓側に数台の机のある閲覧コーナーと、カーペット敷きの絵本室がある。少し奥まったところに、ソファでくつろげるＹＡコーナーがある。ＹＡというのは、何のことかと思っていたが、ヤング・アダルトの頭文字で、特に読書をしてほしいぼくたち中高生のために、図書館のお姉さんが気配りして作ってくれている特別なコーナーであると・・・、これは、だいぶ後になって知った。ここの書棚には、中高生向けの小説だけでなくスポーツの本やコミック本まで置いてくれているのが嬉しい。コミックは、ほとんどが利用者から頂いたものであり、現代の日本のコミックは、読み物としてもスゴイらしい。

二　図書館に猫がいる

図書館としては、適した構造だと思うが、洋館のようなデザインになっているので、窓は細長く、開館前の照明が消されている今の状態では、天井の吹き抜けからの陽光だけがたよりだ。

外の明るさとの違いにだいぶ目が慣れてきた。ぼくは、直線的に鋭く流れる様な視線を感じて、もう一度、館内を見渡す。

「カウンターに猫がいる。カイ、見ろよ」と、サトルが叫ぶ。

ニャーオと言う鳴き声と同時に「おはよう、インターンの皆さん」と、僕には確かに聞こえた。

「誰か、職員の方、いますか」と、ぼくは少し声を張り上げた。

「今日は、館長さんが出張されています。」と、少し硬い感じだが良く通る声がする。

「私、図書館の司書のミルク・J・キャラメルが応対させていただきます。」二十代後半から三十代ぐらいのお姉さんの声だ。

ぼくには、もうはっきりとこの猫が話しているとわかる。しかし、信じたくない。

すでに、サトルとミワは、ぼくの後ろにぴったりとくっついてはなれない。ぼくも怖いというのに。少しの間があって、と言うより、舌がもつれるようで言葉が出ないのだが、「猫の君が、どうして話せるの」と、やっとの思いで吐き出した。

「私は、話しているのではありません。皆さんの脳内のイオン電子を同調させているだけです。・・・まッ、同じことかもしれませんが」と、その茶トラ猫は言ってきた。

「人間は、考えるときに電子イオンでシナプス間の情報送信をしています。私は、皆さんが使うコンピュータの無線ランと同じように、頭蓋骨を通過して脳内に電子信号を送って話しているだけです。怖

がらないで」
　ぼくの肩越しにサトルが「君は猫なのに、なんでそんなことができるの」と追及する。サトルは、野球部で体も大きいくせに、ぼくを盾にする気かと思っていると、
「あなた、化け猫ね」と、いきなり、この状況で、最も聞きにくいことをミワも、ぼくのもう一方の肩越しに叫ぶ。どうして、ぼくだけ、リーダーでもないのに、こんなことに、と恨めしく思う。
「私は、妖怪のようなものではありませんわ。今日のあなた達のインターンシップの指導を館長さんにたのまれただけですの、キャラメルさんと呼んでね」と毅然として言う。
　ぼくたちは、了解することにした。なげやりなと思われてもいい、それほど、この化け猫、いや、司書のキャラメルお姉さんは、頼れそうなのだから、しかたない。
　どうやら、サトルもミワも同じ考えのようだ。優柔不断というか、協調性があると言うべきか、どちらにしても、こうしてぼくたちの奇妙なインターンシップは、始まったのだ。

三　インターンシップを開始します

「図書館は、十時開館よ、まずは館内の床の掃除機がけをお願いします。あッ、絵本室のカーペットは、別の掃除機を使ってね。それから、閲覧机やカウンターの雑巾がけもお願いしまーす。」と、キャラメルお姉さんがいっきに指示する。
　ぼくは、なーんだかめんどうくさい所にインターンで来てしまったと少し後悔した。サトルとミワも同じ目をしている。

ぼくは、あッ、しまったと思った。ぼくたちの考えていることは、キャラメルお姉さんによると、イオン電子の位相だの、変動だのにより、簡単に言うと、お見通しだったのだ。

既に、遅い。

「みなさんは、「ベストキッド」と言う映画を見たことがありますか。」

キャラメルお姉さんは、また、突然、変なことを言い出す。「いつもいじめられている、とあるアメリカの下町の少年が、沖縄出身のカンフーの達人の老人に弟子入りして、空手大会で優勝するお話しです。始めにさせられたことは、何だかわかるかしら」

サトルが「あッ、ぼく知ってます。雑巾がけですよね」

「ぼく、あの映画、大好きで、最後は感動的で・・・、雑巾がけが実はカンフーの型の修行になっていたんですよね。何回もビデオ屋さんから借りて見ました。」と、サトルのやつ余計な同調コメントをする。

ということで、ぼくたちは、雑巾がけを始めなければならない羽目になった。開館の十時まで、みっちりとさせられた。

ぼくは、別に図書館の「達人」になりたくないと思いながら、館内の床を掃除機をかけて周る。ミワは、絵本室のカーペットを掃除している。女の子は、やはり、様になっている。

サトルのやつ、すっかりベストキッドのつもりで、閲覧机を、両手に雑巾をもって、カンフーの型みたいな奇妙な格好をしながら、ふいている。単純なやつだ。

その後の午前中のぼくたちの仕事はと言えば、開館十時からは、昨日、小学校の学級文庫から返却さ

れたという本の山を、書棚へもどす作業だった。
図書館の本は、書棚の中に置かれている状態で、タイトルが見える部分を「背」と言うそうだ。ぼくは、本の背中と思うことにした。図書館の本の「背」の下のほうにラベルが貼ってある。これを、「背ラベル」と言い、記号が書いてある。それを専門用語で「請求記号」と言うそうだ。どの世界にも、ぼくたちを退屈にさせ、試験で苦労させるために専門用語というやつがあるようだ。請求記号は、例えば「９３４オ」と書いてあると、どこの棚のどのあたりに戻せばよいかわかる仕掛けになっている。
最初の三けたの数字は、日本十進分類ＮＤＣの三つだそうだ。ほんとうは、まだ細かいらしいが、小さな図書館では、三けたで十分と、キャラメルさんが教えてくれた。ちなみに、この場合の「オ」は、著者の名前の最初の頭文字からとられている。
ぼくたちは、午前中、ひたすら本と格闘してやっと昼休みとなった。勿論、サトルは、ベストキッドになって満足していた。

四　図書館ワーク

「お昼休みは、ボランティア室を、お使いなさいね」
そう言い渡されて、修理中の張り紙や、キソウ（寄贈）された本で登録作業済みのラベルが貼られたコンテナが雑然とする中で・・・お弁当を食べたのだが、妙に落ち着くのが不思議だ。
ミワは、お弁当を食べると直ぐに館内のコミック本のあるコーナーへと消えた。食後の漫画もいい。やっぱり、図書館のインターンシップも楽しいものだ、と思っていると、窓越しに、外からヨモギ猫が

こちらを見ている。
「おい、サトル、起きろよ、また猫がいる」
サトルは、弁当を食べた後、日課の昼寝タイムに集中しているようだ。ぼくは、無理に起こすのをあきらめた。グリーンと灰色の模様の猫が確かに外にいたのだ。
ぼくたちは、午後一時には、言われたようにカウンター前へ集合した。いつ来たのか、カウンターの中には、職員らしい別のお姉さんが、ちょうど返却本をもって来たご老人から読んだ本のことを聞いている最中で、楽しそうな会話が続いている。後で教わったことだが、図書館員は、自らは本の感想を露骨に利用者に聞かないそうだ。勿論、本人が話す場合は別だ。何にでも、例外はある。その本を自館で購入するかどうか知りたい場合もあるからだ。
そのカウンターにいる職員さんは、髪は少し栗色で肩ぐらい、目鼻立ちもはっきりしているが、ぼくたちより、五〜六歳ほどしか離れていない、大学を出たばかりのような女性で、感じのいい愛らしい顔だちをしている丸顔の人だ。
紺色の図書館エプロンで目立たないが、模様のあるモスグリーンのブラウスに灰色ッぽいシックなタイトスカートを、ぼくは見逃さなかった。
サトルは、まだ眠そうな目をしているが、ぼくは、さっき窓越しに見たヨモギ猫のことを思いだして、目がすっかり覚めてしまった。
ぼくは、心の中で「カウンターのお姉さんも、図書館猫ですか」と意識してみた。キャラメルさんの「ふふ、ふ」と言う笑い声が聞こえた気がしたが、それっきりだ。

「インターンのみなさん、今度は、セミナー室へ移動してね」
キャラメルお姉さんのテキパキした指示に促されて向かったセミナー室には、部屋の中央に五～六台の会議机が置いてあり、ホワイトボードが脇にあるだけだ。ぼくたちは、言われるままに三人、横に並んで座った。テーブルの上には、茶トラ猫が、ちょこんと座っている。
この時、部屋に入ってきた人は、さぞかし、間抜けな三人組みに見えたことだろう。やがて、キャラメルさんの歌うような、自信に満ちた声が響いた。
「午前中は、良く働いていただきありがとうございました。」
図書館員は、一日に何度、「ありがとうございます。」と言うのだろうか。これは、面白いテーマになるかなと、たわいないことを考えていると、
「図書館のお仕事を少し感じていただけたと思います。」
サトルは、目がさめたのか、「あのー、次はどんな修行ッすか、また、ベストキッド、やりたいなー」などと言いだす。
「午後からは、図書館について知っていただくためのワークをしますわ」とキャラメルお姉さん、言葉は丁寧だがピシャリと厳しい。
「図書館員は、それぞれ得意とする分野があります。私は、マネジメント（経営戦略）を専門とする司書ですの」
「ですから、みなさんには、図書館の活用法を体験しながら、経営やマーケティング一般のワークを

していただきます。」
今まで、もじもじしていたミワだが、さすがに二年生で生徒会の副会長だ、大事なことは押さえる。
「私たち、インターンシップの成果を、まとめて学校で発表しなければならないのですけれど、それって、報告書のようなものにできますか」と、タノモシイ質問をした。
「良い質問です。みなさんの報告書の役に立つこと、間違いなしですわ」と、機嫌のよいキャラメルお姉さんの声。
ぼくは、内心、なんだか良くわからないが、これで報告書ができてしまえばラッキーだと、過剰な期待をしてしまった。
「これは、ワークですから、みなさんも、積極的に参加しなければだめですよ」と、当然だが、ぼくの下心を読み取ったような言葉が、キャラメルさんからダメ押しされた。
そして、さっそく、始まってしまったのだ。

「図書館と言うと、みなさんは、どんなイメージですか」
積極的にと言うので、早速、ぼくは、「本が自由に読めて、借りられるところです。」と自信をもって答える。「パソコンでゲームもできる」と、サトル。「漫画本も置いてあるところ」と、ミワも学校のノリでテンポよく答える。
「まッ、どれも、間違ってはいませんね」
少し間があって、ここだけは、猫らしく耳の裏を器用にかきながら

「でも、なぜ、そのような場所があるのかと思ったことは、ありますか」
ぼくは、深く考えないまま、不覚にも「それは、図書館だからです。」と答えてしまった。
意外にも、お姉さんは優しい口調で、「それは、正直ですけれど、答えになりますか」
「すみません、せっかちでした。」と、ぼくは直ぐに反省した。
ミワは、冷静だった。「私たちには、本が必要だから、水や空気のように・・・」
「それは、良い答えのように思います。」と、お姉さんの目が、さらに大きくなった。
「本の中には、何がありますか、考えてみましょう。」と続ける。
「本の中には、言葉があります。」と、さっきの失点回復のために、今度は良く考えて答えた。
「そうですね、言葉は大事です。私たちは、多くの場合、言葉で考えているのですからね」
ゆっくりと立ち上がった茶トラ猫、いや、キャラメルさんは、話を続けた。「だから、人は、言葉で考えたことを文字という情報や知識にして、洞窟の壁画、粘土板、パピルス、羊皮、紙、磁気テープ、光デスクなど、いろいろなものに残し、さらに新しい言葉や情報、知識が生まれ、私たちは、発展をとげてきました。そして、言葉や文字は、みんなのものです。原則として、独占するべきものではありません。」
「でも、チョサクケン（著作権）と言うのを聞いたことがありますよ。音楽の作詞家、作曲家にもケンリ（権利）があると聞きます。」サトルもようやくワークに入ってきた。
お姉さんは、サトルの前で止まり、「勿論、著作者にも権利があります。しかし、図書館は、言葉や文字を扱う特別な場所なので、権利の一部が解除されます。著作権法に「制限」として書かれています。

これは重要です。」学校の先生なら、ここは必ずテストに出すからノートに書いておくようにと言うところだ。

「著作権と図書館は、少し専門的ですので、今日は立ち入りませんが、いつも、少しだけ気にかけておいてくださいね」サトルも、ワークに参加できて満足そうにうなずく。

五　カダイ（課題）を探す

「ところで・・」キャラメルさんは、更にワークを進展させたいようだ。

「図書館が特別な場所とされるのは、言葉や情報が集められ、その情報や知識を使って人々のそれぞれの課題を解決する場所でもあるからです。」

「ぼくたち、別に何の課題もありませんけど・・・・ノープロブレムです。」と、サトルは外国人がよく映画でするポーズをしてみせた。お調子者と思われることに、たいして抵抗がないのだろう。

「そんなことありませんわ、課題が見えないということもあります。何が問題なのかを発見する力は、とても大事で難しいことです。みなさんは、何が課題なのかを発見できないうちは、そのための努力をすることもできませんよね」

ぼくは、なるほどと納得した。「確かに、自由に言葉や情報に接するのでなければ、ほんとうの課題は何か、どのように努力して、解決するかも考えないままでいるかも知れない。」

どこが悪くて、いつも三球三振するのか、フォームが良くないとか、いろいろ考える。どうして、学校のテストの点数が、六十点以上にならないのかも・・・・、勉強の仕方が悪いのか、とか。

「でも、それは図書館でなくても、できるよね」とサトルはしぶとく異議をはさむ。
「勿論、そうですわ。図書館でなくても、学校でも、家庭でも、職場でも、カルチャースクールでも、たくさん教わることはありますね。でも、図書館ほど無制限に、自由に調べたり、考えたりすることはできないかも知れません。」と、キャラメルさんは、ひとまずここまでを締めくくった。

「みなさんは、インターンシップの成果を学校で発表するわけですけれど、今日のワークは、そのための助けになるものにしたいと思いますが、いかがかしら」
ぼくは、まったくもって賛成だ。できれば、早く片付けて後はゆっくりと図書館ですごしましょうと、言ってくれれば最高なのだが。
当然だが、サトルとミワも異議はない。夏休みも近いのだから、めんどうなことは、さっさと片付けたいものだ。やはり、図書館をインターンシップに選んだことは正しかった・・・と、その時、ぼくたちは、安易に思ってしまった。
こうなったら、キャラメルお姉さんに、そんな下心を知られてもいいとさえ思った。
「あなたの課題は、なにかしら」
やっぱりぼくの考えていることは、お見通しらしい。
あわててしまい言葉がでないこんな時、たよりになるのは、やはりミワだった。昔のアニメでよくある少し大きめの黒ぶちメガネを、きゃしゃな人差し指で直しながら、「わたくしたちの高校の将来についてをテーマにしたいと思います。」と生徒会副会長らしい発言。

「みなさん、それでよければ、テーマとするのも面白いですね、いかが」
いかが、と問われて、ぼくの課題は、などというのは、めんどうでもあるし、第一、自分の困っていることを、披露して、どうこうされるのもいやだ。
隣のサトルも同じ思いであることは、聞かなくても、シャーペンをいじり始めたしぐさでわかる。
ということで、いや、「ミワ様」の気の利いた提案のおかげで、ぼくたちの課題は決まったのだ。
ぼくたちの町、ライラック町には、ライラック高校という普通高校がある。今、町では、唯一の高校の将来が地域課題となっている。どこの町でも同じだが、人口減少と少子化の波は、ようしゃなく押し寄せているのだ。入学する生徒が減少を続けている。
「青少年への奉仕を使命の一つとする図書館としても、できるかぎりの力で、地域に根ざした高校の将来と、発展への具体的な行動のための議論をみなさんとしようと思います。」と、キャラメルさんは宣言した。

「今年度、新入生が二十人未満となったことから、言うまでもなく、ライラック町、ライラック高校の将来については、時間的にも非常に差し迫った課題となっています。このような早急な課題を解決するためには、すぐに対処すべきことも重要ですが、それと共に大切なことは中長期の見方を組み込んでおくことです。短期と中長期の「二兎を追う」考え方です。」
「二兎を追うものは、一兎をも得ずと、確か言いますよ」
突然、自信に満ちた大声で、サトルが、「一つずつ、課題を乗り超えることが、この場合、堅実な作

戦と思います。」と、野球部の合宿ミーティングみたいなことを言う。
キャラメルさんは、優しく言う。「サトル君、それは、とっても大事なことですね。でも、方法は常に一つではありませんよ」長い尻尾がいたずらっぽく左右に揺れて、
「例えば、調べものをするとき、報告書にするとき、一冊の資料だけを根拠に結論を出すと教わりましたか。複数の資料に当たることは、最近では、小学生でも学びます。」
「ほんとうは、課題は二つあるかもしれない。そのときは、未知数が二つだから、方程式も二つ必要です。」思わずぼくもワークに参加。
「それも、良い例です。課題が一つだけだと決めてしまうと、もう一つの課題が解決の障害になっていることもあり、解決を遅らせるとも考えられます。今回は、時間軸を考慮してみたわけです。」
ライラック町では、当面の対応については、既に良く検討されており、ぼくたちは、中長期の解決策を提案しておきたいところだ。キャラメルさんは、ぼくたちのワークを、そのような方向へ導きたいらしい。少し面白くなってきた。

六　「チセイガク」（地政学）って何ですか
「ライラック高校の将来について、何らかの意味の有る回答を引き出すためには、その学校の置かれる地政学的な意味での環境を見ておく必要があります。」
「あの・・チセイガク、何ですかそれって」
こういうときだけは、サトルが先に言ってくれて、ぼくは大いに感謝した。

「それほど難しい意味ではなく、古くから国と国の間の外交交渉などで、使われた言葉です。チセイガクテキニ　と言うのを聞いたことはありませんか。」
猫が良くする前足を揃えて伸ばす格好をしてみせた。
「私、聞いたことあります。」
ミワが説明を引き受ける。彼女は、地理、歴史にとても詳しい。「確か、地理と政治などを組み合わせた意味です。昔から国と国の間にどんな地形が広がっているかは、資源獲得や防衛など大事な外交や交渉の一つの条件でしたから。」
「そうですわね。今では、大きな意味で環境と政治の組み合わせですかしら、例えば、石油資源と海洋運搬ルートなどのように」
今度は、前足を折りたたんで、ぼくたちの真ん中あたりの位置を選んで座った。
もっと、身近な例で言えば、駅の近くに出店する複数のコンビニの売り上げは、立地条件と、とても関係しており、まさに地政学や経営戦略の問題だ。
「今回は、近くの町の高校と私たちの町の高校との生徒獲得競争をモデルにして考えます。」
「獲得競争と言われると、ぼくたちは、モノにされたようでいやな感じ・・・」と率直な感想を言うサトル。
勿論、生徒が集まらなければ、町の高校は、コンビニと同じように撤退するか、必要であれば、存続するため町の大きな負担となる。いずれも重要な地域の課題となる。
これらを念頭に置いたうえで、キャラメルさんは、ワークのための前提を説明した。

これから、ますます明らかな少子化傾向は、家庭で自由に使えるお金の中から一人の子どものために出せる教育へ使える額を高める。まッ・・・・、簡単に言うと一人ッ子の方が、八人大家族より教育にお金がかけられるわけだ。
勿論、当面、この自由に使えるお金に大きな減少などがないと仮定しての話だが。このことは、通学圏の拡大を可能する。だから、ライラック町、ハマナス中学校の卒業生にとっては、通学費の最も低い、町内にあるライラック高校と、通学費を必要とする近隣町村の高校、例えば同じ普通高校のミント高校への進学を選ぶ差が小さくなる。
だんだん話が難しくなってきたので、今度は、ぼくが質問することにした。
「高校を選ぶうえで決定的な差となる原因とはならないので、どちらも選ばれるかもね、と言う意味ですわ。」と、確認した。
すると、親切に、別の例えで説明してくれた。
「コーヒーの味の違いがわからない人にとっては、キリマンジャロや他のどんな山の名前が書いてある缶コーヒーでも無造作に、せいぜい缶コーヒーのラベルが赤いか青いか、鮮やかか程度の気まぐれで選ばれます。」
キャラメルさんの目が鋭く光る。
「・・・でもね、そのような状況が長く継続すると、徐々にミント高校に生徒が集まり、クラブ活動

などの面でも、例えば野球部は最低九人以上、サッカーは十一人以上というように規模の利益が生まれるから、突然に明確な形での変化が現れるかも知れませんよ」
なるほど、昨年のハマナス中学校の進路志望の動向で、ライラック高校へ入学者が大きく減ったのは、このような顕著な局面（変化）を意味しているらしい。

七　ブンルイ（分類）はすごい

ぼくたちの課題をめぐる状況が少し分かってきたところで、課題を考えるためのヒントを教えてくれた。キャラメルさんによると、図書館は、一つの課題を調べるとき、いくつかの違う分類の資料で考えるらしい。ぼくたちを、ゆっくりと見渡して、
「みなさんは、ブルーベリーを調べるときにどんな本を探しますか」
サトルが自信をもって手を挙げた。学校ではないのだから、何も手を挙げることもないのにと思う。
「ぼくなら、百科事典で調べます。一番簡単」
「一応の知識は、得られると思いますが、その他に何かありますか」
キャラメルさんが、ぼくの方を見る。
「どんな産地があるか、どんな種類のブルーベリーがあるか、ブルーベリーの歴史なんかも知りたいです。」
「ブルーベリーは、果物でもあり、栄養食品で、特産品、スイーツやお菓子の材料としてもいいわね」
とミワも嬉しそうに答える。

「今、みなさんは、ブルーベリーというテーマから、いろいろな方向へ発想を広げました。このように、発想を広げる方法の一つに、「マインドマップ」があります。図書館では、良く使う方法です。図書館にもマニュアル本があるから、後で御覧なさいね」

マインドマップは、課題解決のための発想法の一つであり、自由に、思いつくままに、言葉を記入し、線を引いて関係付けるのだそうだ。あまり考え過ぎずに、どんどん発想を広げるのがコツだ。

突然に、キャラメルさんは、ホワイトボードに目を向けると、ぼくとミワが発言したことが、ボードに浮き上がった。どうして、マーカを使わず書けるのかと思いながらも、丁寧に説明されてもめんどうなので、あえて聞かないことしにた。サトルは、単純に面白がっている。

・キャラメルさんがホワイトボードに写した「マインドマップ」

キャラメルさんは、きまぐれな尻尾をゆらせながら、ぼくたちに向き直り、
「今度、みなさんは、図書館の日本十進分類に沿って資料を集めることができますよ。図書館の分類は、〇から九まで区別して、本（資料）を整理しています。」
サトルは、彼なりに、目の前のモヤモヤが、晴れたかのように、納得して答える。
「なるほど、ありがとうございます。図書館の本棚に五とか七とか数字が書いてあるのは、こんな意味があるのがわかりました。」
「サトル君、納得ね。だから図書館では、一つの課題を、一〇個の資料を総動員して考えることができます。分類は、とっても大事ですのよ。しかも分類方法は、一つではありません。」
「今度は、高校を選ぶ理由を別の見方で考えてみましょう。主な関心を、消費と生産に分けて考えます。これは、人の営みを分類したと言う点で図書館の分類と似ています。」さらに、詳しく説明してくれた。
「縄文人が鮭を取って食べました。これは、消費者の消費ということもできるし、その前に生産者として生産したとも言えます。横道にそれますが、この生産は、今は、所得とつながりますから、人はとても関心を持ちますけれど、それ自体、常に消費と切り離すことはできないことですよ。そのことを忘れると、不必要な生産と裏腹に不要な消費がつきまといます。これは、現代社会の大きな課題であることは御承知ですね。蛇足ですけれど。」
少し、キャラメルさんのお話しが難しくなって、ぼくはついていけない感じだ。ミワは、興味があるのか目を輝かせてうなずいている。

「キャラメルさん、図書館の分類を具体的に教えてください。」
サトルがタイミング良く質問してくれた。
「興味をもっていただいてありがとう。日本十進分類は、次の〇から九まであります。」
〇　総記
一　哲学
二　歴史
三　社会科学
四　自然科学
五　技術、工学
六　産業
七　芸術、美術
八　言語
九　文学
（ＮＤＣ改訂九版第二次細目表）
「なんとなく、イメージできますわよね、みなさんでしたら・・・」と、キャラメルさんの少し薄茶色の瞳が気まぐれに輝き、ぼくたちを見渡す。
「先ほど、お話ししたように、人の営みは、大きく二つに分けて考えます。」

一　消費
二　生産

「シンプルですけれど、この考え方も大事よ」
「そうか・・・、あの図書館の十個の分類は、人の営みでは、二つに再度、分類できるということですね」ミワが急に大きな声を出すものだから、ぼくは、ビックリしてしまった。
「そうすると、さっきのブルーベリーを調べるときは、スイーツやお菓子は、「五　技術」を、特産品は、「六　産業」、種類は、「四　自然科学」などの書棚から見ていけばいいのね。それに、それぞれに消費の見方と生産の見方があるわ」と、やたらと嬉しそうだ。

「分類することは、問題を解決するうえで、考えたり、調べるのに、とっても大事です。大きく分類すること、細かく分類すること、どちらもですけれど」と、言ってからキャラメルさんの説明が再び続く。
「高校を選ぶ行動は、同じ性質や目的関係が強い高校の間に、より大きな影響があります。」

「同じ性質と言うとカレーライスとライスカレー・・・ッてことですか、それともダイダイ色とミカン色のことですか。」またもや、サトルが口をはさむ。
キャラメルさん、サラリと続けた。

「同じ性質とは、この場合、交換可能なとか、交代できる、という意味です。Ａ社とＳ社のスマートフォンのように少しのサービスの差で機種変更するサトル君のような利用者がいる状況かな。携帯電話に関しては、比較的ですけれど、取り換えの可能な関係が見られます。」

「昨年から今年の冬のように灯油の価格が乱高下、不安定であれば、灯油を使わない電気ストーブの売り上げが上昇するかもしれません。しかし、灯油の価格が低下すれば、こんどは電気ストーブの売り上げも低下するかも知れません。灯油ストーブと電気ストーブの関係も同じですね、キャラメルさん」と、ミワも別の例を出した。

少子化により減少した近隣町村の高校進学希望者数に対して、ミント高校の入学定員数が大きく減少させなければ、相対的にミント高校への入学がこれまでより容易になるので、その高校への進学が容易になり、同じ性質のライラック高校の入学は減少する可能性がある。なぜなら、ミント高校とライラック高校は、共に普通高校として、本当は、灯油ストーブと電気ストーブのような関係にあるからだ。ぼくも、さらに話しを広げてみた。

「直ぐに気がつくと思いますけれど、近くの町村で、実質的に介護関連等の科目に特色のあるカモミール高校や、農業観光関連に特色のあるレモンバーム高校は、ライラック高校やミント高校と比べて、性質が異なるので、例えば、灯油、電気に対して、薪や木質ペレット燃料ストーブのように影響が比較的少ないかもしれませんね。」

今後も、同じ普通高校であるミント高校とライラック高校の入学者について、影響や関係は強いかもしれない。

八　「センショ」（選書）と「ソウゴ　タイシャク」（相互貸借）

「さて、・・・どうでしたか。今まで、お話ししたようなことは、皆さんが社会に出て、会社を始めようとしたときは、勿論、会社の企画会議で、あなた方に意見を求められるかもしれません。こういう時のために、図書館には、マーケティングや経営の入門書が置いてあります。小さな町の図書館では、まず、初心者用や入門書をそろえるのが選書の第一歩です。

選書とは、図書館がどんな本を購入するか、無料で本を頂くときなどのようにキソウ（寄贈）を受けるかを決める仕事のことをいいます。小さな町の図書館は、なにより「土地の事情」に合うように、利用される本を選書することが求められるからです。」

ここで、サトルがすかさず質問した。

「野球の本も図書館にありますけれど、トレーニング方法などは、ぼくたち高校生の場合、あまりに初心者向けの本では、少し物足りないです。なんとかできますか」

「それは、良い質問です。図書館には、あまり利用のない本、どんなに定評があると言われても利用が少ないと見られる本は、スペースや予算のこともありますので、先ほどお話ししたように、他の図書館から借りることがあります。」と丁寧に答える。

「しかし、今後、町で利用が増える本や、蔵書として揃えていきたいと方針を立てた本などは、購入することもあります。よろしいですか」

キャラメルさんは、テキパキとしたもの言いで付け加える。

良い質問ですと誉められて、気分をよくして納得した様子のサトルに、キャラメルさんは、さらに図書館のリクエストサービスについて教えてくれた。
「図書館には、一般にリクエストサービスがあります。リクエスト用紙がカウンターに備えてありますから、お気に入りの作家がいて、さらに読みたいとき、調べものをしていて、さらに詳しい参考資料をお探しのときなど、それに書いて、遠慮なく図書館員に言っていただければ、すぐ購入できないときも、他の図書館から参考となる数冊の資料を取り寄せることができます。遠慮はいりませんよ、これは、図書館員の最も基本的で、大事なお仕事の一つですから」
「あのーオ、それってお金がかかりますか」
「図書館にある資料を利用する場合には、基本的に無料の原則があるのよ、サトル君」
「基本的にということは、例外もあるのですか」
ぼくは、外国の図書館で有料のサービスがあるのを聞いたことがあるので、サトルが気づかないのではと思い、そう言ってみた。
「そうね、カイ君、自らの図書館の資料を貸出するような場合には、無料の原則がありますけれど、他の施設の資料など費用のかかる場合は、それぞれの図書館の判断もあるという意味なのよ」
「それじゃー、やっぱりお金がかかるじゃないですか」サトルも、キャラメルさんに、ここぞとばかりの質問をたたみかける。また、サトルのやつテンションが上がってきた。
「どんなに大きな図書館でも、出版される年間数万冊、全ての本を購入できないことは分かりますね」今度は、サトルの方を見てキャラメルさんが質問する番だ。

「それで、図書館は考えたの、何だと思う」キャラメルさんの薄茶色の目がまたも楽しそうに光る。
「何ですか、教えてくださいよ」サトルの目が哀れに空中を泳ぎだした。
「つまりね、図書館は、図書館協力が良くできていて、特に、お互いに他の図書館から資料を借りることができる合意と仕組みがあります。お互いに貸し借りしましょうね、と言う意味で相互貸借と呼びます。このことを考慮に入れて、図書館の本を選書しています。一般に、お互い様なので、片道の送料だけ負担する場合が見られます。」
なるほど、そうすると、少しはお互い様なのだから借りやすいと理解できる。でも、小さな図書館は、大きな図書館からほとんど、借りるだけになると思う。ぼくは、率直に、その疑問を聞いてみた。
「カイ君の疑問は、もっともな考えね。そうね・・・、小さな図書館は、相互貸借というより、事実上、他館からの協力による借り入れに近い場合があるかも知れませんね」
「それでも最近の小さな図書館は、インターネットで自らの図書館の本を公開している所もあります。必要でしたら、お貸しできますよ、と言うことね、その地域に関する特別の資料などは大きな図書館にないですから利用される場合もあるわ」と、キャラメルさんは、付け加えるのを忘れない。
ここまで、だまって聞いていたミワだが、一人ごとでも言うようにゆっくりと口を開いた。
「多分・・・図書館のシステムが他の施設と違うところですね。地域振興や活性化と言う場合には、その市町村のエリアの産業が発展することを、まず考えます。お店だと自分の所の売り上げや営業利益や経常利益を第一に考えますけれど、図書館が扱うのは文字、活字、情報、知識などを通した最終的に文化ですもの、時には時空間を超えたエリアですよね」

「そうね、ミワさん。古代の洞窟の壁画にあるように情報や知識は、独占してしまわない知恵が人類と社会にあったから、私たちは、大きな繁栄を遂げてきましたのよ、ですから、求めている人がいれば、例え市町村が違っても提供すると考えるのが図書館であり、その使命です。」
「そうすると、図書館ッて言うのは、慈善団体かＮＰＯ団体みたいですね」
サトルも彼なりに、図書館のイメージをしたようだ。
「えーと・・・でも、たいていの場合、なぜ市町村がやっているのですか」
「勿論、サトル君の言うように、ＮＰＯ団体などがされているところもありますし、有名なニューヨーク公共図書館も国立や市立ではないわよね」
「日本でも企業や財団などの運営する図書館があるのを聞いたことあります。でも、都市部では市立図書館がたいてありますけど、いずれ変わると言うことですか」
「それは、なんとも言えないわね、ミワさん。私たちの国では、誰もが情報や知識を容易に、公平に得ることができることを大事にしています。子どもの教育のためには、市立小学校、町立小学校などがあり、これら公立学校と同じように図書館も公的なお金を出して施設を造り、維持することも必要と考えています。」
「私、思うんですけれど、財団や非営利団体などが運営するかどうか、あるでしょうけれど、図書館は、普遍的なゾウヨ（贈与）のシステムではないかと思うわ。つまり、人々の知恵をゾウヨ（贈与）するための普遍的な仕組みのように思います。常に環境に適応して、人類が生きのびるために、どのような形にしても、正しく知恵がゾウヨ（贈与）され、知が自由な発想で創られていくべきです。現在は、コウ

カン（交換）が中心のように見えますけれど・・・」

ぼくは、経験上、ミワの話が少し難しくなり、土石流や火砕流のように押し寄せる危ない前兆を感じたので、ミワには悪いが、分かりやすい話題に急いで変えた。

北海道立図書館のパンフレットを図書館内で見たことがあるので、そのことを聞いてみた。

「道府県立の図書館もありますよね。そのような所は、町村の小さな図書館のために貸出の協力をしてくれないのですか」

「カイ君、良く知っていますね、道府県立の図書館の役割の一つに、小さな町村の図書館を支援するという使命もあります。市町村支援課などの名前の課のある場合もありますから」

「それでは、北海道内の場合だと、まずは道立図書館から借りられるんですね。蔵書数も多いだろうから・・・」

ぼくは、確認するように聞いてみた。

「今では、インターネットから貸出の申込みができます。小さな図書館でもインターネットパソコンさえあれば、比較的、容易に借りられますよ、ただし、今は、送付いただくとき道立図書館に負担していただいていますが、当然ですけど、本の返却の送料は、借りた側の図書館が負担します。」

道路に、国道や道道があるように、本や資料もネットワークが整っていると言うことだろうか。キャラメルさんは、そのことを説明してくれた。

「図書館には、図書、資料によるソーシャルなネットワークシステムがあると言うこともできます。」

サトルは、今度、ソーシャルに食いついてきた。何にでも食いつく海の中の獰猛なウツボのようなやつだ。

「ぼく、知ってますよ。ソーシャルネットワークとは、フェイスブック、ツイッターなんかのことですか」

キャラメルさん、いちいち親切に答えてくれる。

「フェイスブックは、近年、インターネットから生まれた、人々を結ぶネットワークの一つですけれど、図書館のソウゴ　タイシャク（相互貸借）の制度は、インターネット以前からある図書館の間のネットワークであり、銀行のインターバンクに近いですね。図書館は、市町村間や場合によっては、他都府県の図書館と本の貸し借りをあたりまえのようにしています。一般の行政では、あまりないことです。最初から補完し合うことを前提に成立している珍しい組織です。勿論、信頼の関係や図書館の使命の合意に基づき、相互に融通したり、助け合っているわけです。その根拠は、図書館法と言う法律にあります。これは、後で少し説明します。」

「インターバンクは、聞いたことあります。銀行間では、特別の金利でお金を貸し借りする取り決めがあると聞きました。ある銀行で一時的にお金が急に必要になった時など、低い金利で貸し出すことなどですよね。」ミワのそんな知識は、ぼくにとって驚きだ。

キャラメルさん、満足そうに眼を細め、

「そうですね。どんなに大きな図書館でも、毎年、数万冊も出版される図書、さらに雑誌などの全てを

購入することは不可能よ。ですから、図書館の間で、資料を融通する合意ができています。特に、小さな町の図書館は、資料費やスペースの限度がありますから、利用の高い資料や、ホウシン（方針）を立てて収集したい資料を優先して置いています。」

「キャラメルさんの言うように、高額で利用の少ない専門書などもありますから、図書館の間でお互いに、必要に応じて貸し借りできることを前提に運営しているのですね」ぼくも、図書館の利用者として日頃、感じたことを言ってみた。

キャラメルさんによると、ホウシン（方針）とは、図書館の「シリョウ　シュウシュウ　ホウシン（資料収集方針）」のことで、あらかじめどのようにして、どのような資料（主に本のこと）を購入したりキソウ（寄贈）を受けたりするかを決めておく規則のことらしい。この方針のもとに「センショ　キジュン（選書基準）」、「ハイキ　キジュン（廃棄基準）」などを定めるそうだ。

「図書館の人は、どうしてそんなにまでして、本を集めたり、調べたりするのですか」

率直な疑問を、ぼくはぶつけてみた。

「それは、後で御説明しますけれど、図書館の使命だからなの」と、考え事でもするように目を閉じてから、すぐに、こう続けた。

「有名なお話しですけれど、今では会社、学校で無くてはならないモノにコピー機があるでしょ。それは、図書館に何度も通って資料を集めて研究した、ある貧しい一人の青年のアイデアから生まれました。後に、図書館へ多大な寄付をしたそうですけれど・・・。図書館は、誰にも平等なチャンスを用意して

います。これを支えるのが、図書館の「無料の原則」です。」

「・・・さて、さらに、みなさんとのワークを続けますが、その前に、休憩を少しとりましょうか」

キャラメルさんは、少し疲れたのか、眠りこんだように見えた。

ぼくたちも、学校の授業のように聞きなれない言葉が飛び出してきたせいもあり、少し疲れたので、この休憩は大歓迎だ。思い思いに気分転換をするためにセミナー室を出た。

嬉しいことに、もどってみると、机の上には、ホットコーヒーと大粒の塩ミルクキャラメルが一個、置かれていた。ぼくたちは、すぐに塩ミルクキャラメルを口にほおばり、キャラメルさんの話を聞く姿勢をとったのだった。

九　高校を選ぶ

「それでは、早速ですが、ハマナス中学校の卒業生のことを考えてみましょう。」

ぼくは、少し頭の中で整理してから、「中学生が高校を選ぶのは、やはり経費と将来の進路のことが大きいのではないですか」と言ってみた。

キャラメルさんも、直ぐに同意してくれた。

「ハマナス中学校の生徒が、高校を選ぶ行動の場合は、・・・そうね、先ほどの分類を思いだしてください。考えるときは、消費と生産の場合のようにシンプルに二つ、

一　就学総経費
二　進路期待

から形成されると仮定します。予想される就学総経費は、授業料、制服代、教科書代、その他諸経費の他に、通学費があります。また、将来の進路への期待は、高校を卒業後に目指す進路の方向により高校を選ぶ上で大きな影響を与えます。さらに、クラブ活動などの学校生活の多様性と選択の自由も、自己の将来、人生設計の一部として学校選択に大きな影響を与えますから、これらを含めて、進路期待の中に入れます。」と一気に説明する。

「この分類は、もしかして、費用と収益の関係ですね。費用対効果のように・・・」

「良く気がつきましたね、とっても鋭いわ、ミワさん」と、キャラメルさんの御褒めの言葉まで、とびだした。

「そうすると、当面の対応は、直ぐにわかりますね。」

サトルも、負けずに答える。

「町が補助して、特に入学時の経費が低くなれば、ライラック高校へ進学する動機となるし、経費が少なくなるのは、保護者への魅力的なアピールになると思う。」

「つまり、当面、最も必要なことは、行政として予想される就学総経費に補助することであることは、明らかです。近隣市町村の高校でも、授業料、諸経費への補助が行われる場合があります。いずれにしても、ハマナス中学校生のライラック高校への入学選択を高めるだけでなく、周辺町村からの中学卒業

生の入学増加も期待できます。」ミワがサトルのために説明を加えた。
　でも、ぼくは、経費に関しては保護者の意向が大きいといえるけれど、高校入学の時には、子どもの希望もけっこう大きいかもしれないと思う。陸上大会で優勝した生徒にとって、もっと環境と設備の整った高校へ進学し、さらに自分の能力を伸ばしたいと思うだろう。親に無理をいっても少し遠い高校へ進学したいと思うかもしれない。

　ミワは、入れてもらったコーヒーをまだ飲んでいない。実は猫舌なのだ。ひょっとすると前世は猫だったのかと変な想像をしてしまった。だいぶ冷えたコーヒーを飲みながら言う。
「ライラック高校が、どのような人材を育てるかなど、明確にしておく必要があると思います。各町村で高校があることが何より求められた昔と、社会の背景が大きく違ってきましたから」
少子化への行政のいろいろな努力と対策にもかかわらず、中学校の生徒数も減り、学校運営のうえで、社会的な環境変化が生じていることは誰が見ても明らかだからだ。実際に、小学校は、これまで町内ではあるが統合が進んでいる現実がある。
「そう言えば、金融ビックバンが始まって、銀行の支店の統合があったと聞いたことがあります。なんか、少し似てますね」
やっとコーヒーを飲み終えたミワは、満足そうに言った。

十　長い目でみると

「皆さんは、こんな言葉を聞いたことがありますか」キャラメルさんは、いよいよこれからがワークの本番だというように力をこめた。「すぐに役立つことは、すぐに役立たなくなると」

「すぐに効果の現れる短期の対応、戦術と言ってもいいかしら、それは、直ぐに効果がなくなると言うことです。」

これでも、まだサトルは、ピンとこないようで、

「もう少し詳しくお願いします。」

「例えば、授業料の減額、各種資格試験料の補助、通学費の補助など経費補助の方法は、小売店間の値下げ競争と本質的に同じですから、一定の限界もあります。ここまで、分かりますよね。」

「価格が十分に安く、商品が多様で豊富な大型の小売店と小さな町の小売店との競争となるからです。繰り返しになりますが、小さな町の小売店が生き残るためには、長期の視点、つまり、ビジョンを明確に持っていなければなりません。小さな町の商店街と大規模な小売店の関係も少し似ていますね。」

なるほど、とぼくは思ったが、それはとっても難しいことだ。ぼくは、率直に質問してみた。「キャラメルさん、それは、わかりますけれど、ビジョンは、ぼくたちに無理です。」

「あきらめるのは、まだ早いわね。」

ゆっくりと立ち上がるキャラメルさん。

「そもそも、学校は何をするところかしら、託児所ではないわよね。」

ぼくも、一応の答えはあった。

「学校は、教育の場だから、基本は人を育てるところです。」

「良くできました。それでは、町の高校は何をしたらいいかしら。」
「生徒を育てることです。」とぼくも答える。
「まあ、そういうことかしら。・・・では、なぜ、育てるのかしら。」少し意地悪な質問のように、ぼくは思えた。

「自分で、学ぶ力をつけるためです。」
ミワが、黒ぶちの眼鏡を、親指と人差し指をコの字にして直しながら答える。
「そうね、広い意味で「生きる力」と言う場合もあるし、学び続ける「生涯学習力」とも言えるわね。いずれも教育や行政の言葉ですけれど」
さらに、机の上をグルグルと歩き周りながらキャラメルさんは解説する。
「ライラック町が高校入学者へ補助するのは、町の将来を担う人材を育成すると言う大きな目標と関係しますね」

このようにして、ぼくたちのセミナー室でのワークは、続いた。
既に、中学生の下校時間となっている。学校の先生の職員会議で部活がないのだろうか、数人の中学生が入ってきたようだ。また、この時間は、小学校のサッカー少年、野球少年なども練習時間開始までの短い時間を利用して来館する。
図書館は、一般の大人も利用する施設なので、他の人に迷惑をかけない利用教育がいきとどいているら

しく、複数の足音が感じられるだけで意外と静かだ。

「今日は、ここまでにしましょうね。明日のワークは、当面、短期的に有効な方法を進め、一方で長期的な視点からの方法を準備する「二兎を追う」作戦をもう一度整理します。」

正直、ぼくには、よくのみ込めない内容だ。

サトルは、まったく理解していないに違いない。

「そこで、明日は、今日のワークを整理して、みなさんなりの報告を手助けできるようなところまで進みます。」

キャラメルさんの大きな目がまたも光る。

「明日までの宿題です。カイ君は、今日、お話しした高校の取る選択を整理してください。サトル君は、学ぶ力を育てるとは何か、考えてみてね。ミワさんは、今日のワークを基に、大規模な小売店の出店と町の小規模な小売店の経営を想像していただきます。以上、よろしくね、さようなら」

ぼくたちが重い足取りで図書館を出たことは言うまでもない。

十一　続縄文時代への旅

図書館の周辺は、比較的大きな公園になっており、木製の遊具などもある。ぼくの父がよく遊びに連れてきてくれたものだ。

そのころの父は、日曜日など、まだ小さな双子の弟妹とぼくを、おっくうがらず外へ連れ出してくれて、この公園で遊ばせてくれたものだ。しかし、たいていは、新書本片手に、子どもを遊ばせながら読書の時間だったと思う。ぼくの読書好きも、父からの影響であることは、間違いない。
母は、時々、本を読んでいる父のことを「また、文字を数えているのね」と、ひやかす。
木製遊具の近くに、今でも変わらずにピラミッド型の温室がある。それほど大きなものではないが、どうしてピラミッド型をしているのかと今まで特に不思議ではなかった。
その温室の前を通りかかる。
今、その温室の中に茶トラ猫が入っていったような気がした。
「サトル、今、キャラメルさんが温室に入って行った気がしないか・・・」
ぼくは、少し自信がないように言ってみた。
「カイも・・・見たのか」
「おまえもか」
「いってみようぜ」と言うと同時にぼくは、温室の入り口へ向かった。
サトルも並んで走る。後ろから、「待って」と叫ぶミワの声が続く。
温室の中は、バナナやパイナップルのような南の国の植物がうっそうとしている。夕方近いといっても、温室内はやはり、むっとした感じが首筋にまとわりつく。
それほど広くない温室の真ん中あたりまですぐに来た。天井を見上げると、ちょうど、ピラミッドの頂点の骨組が連結しているのが見える。サトルとぼくは、並んで立った。遅れてミワも合流する。

「キャラメルさん、だったよな。」
サトルが確認し、ぼくもうなずく。
その時だ。ぼくたちのまわりに、頭上から真白な光がゆっくり下りて、かすかに優しい香りに包み込まれたような心地よい感じがしたと共に、天井に引き込まれるようなふわっと宙に浮く自分を、外から見ているような奇妙な感じがした。
目を開いているはずなのに視界を徐々に失い、意識が放出された光に解けるように消えた。
それから、どれほど光の中を漂っていたのかわからない。

あたりに、経験したことのないような、生臭い匂いを感じた。
ぼくは、草むらにうつ伏しているのだと思う。まだ、目を開けていないから、わからないが・・・
突然、低いうなり声を感じて、体を起こし前方を見る。
ぼくの、数メートル先に黒い物体が立ち上がる。・・・ヒグマだ。
ぼくは、後ずさりした。いや、腰がくだけたように、後ろへひるんだだけだ。
ヒグマは、間合いをつめようとしていることは明らかだ。
「だめだ、終わりだ」と声が脳裏を絡めるのと同時に、子どものころ、屋根から落ちた時の一瞬のいやな感覚や、母親から叱られた場面が凝縮して、長い、長い時のけだるさと心地よささえ感じた。
その時、ブルル・・・ボーン、バサ・・、という音がして、ヒグマがぼくの一メートルさきに突然に倒

れた。目と目の間、眉間から血を吹いて倒れている。
同時に、数人の男たちが歓声を上げながら、槍やナタのような武器をもって近づいて、なれた手つきでヒグマにとどめを刺し、解体を始めた。すでに、肉を削ぎとって、かじっている者もいる。
ぼくは、見ないようにした。
「カイ、だいじょうぶか」と懐かしい声は、サトルだった。
彼も、手にナタのような武器を持っている。ぼくの顔は、多分、蒼白で、あとから、あとから、冷や汗がべっとりと体に噴き出すようだ。
「どうやら、オレたちは、古代に来てしまったと思う。」
ぼくたちがよくやる、電車で居眠りして、次の駅に来てしまったかのように、アッサリと言う。
まッ・・、どういって見ても、この光景は、変わりそうにない現実だからしかたがないのだが。
サトルの隣に、ぼくたちと同じぐらいの少年が居るのに気づいた。彼も今、ヒグマを解体している男たちと同じ、麻のような粗末な衣服を頭からかぶっているところを見ると、男たちと同じ仲間のようだ。
「オマエモ、カイ　トイウノカ」
彼が言葉を発した。「サトルハ、カリヲスル　ウデマエガ　スゴイ、オマエモ」と聞いてきた。
どうやら、サトルの野球部としての遠投の腕が、ここでは、狩りに役立つというか、神業のように見えるらしい。彼の、外野からの正確なバックホームが、こんなところで役立つとは、人は、努力して無駄なものは無いということか、と納得した。
いやいや、感心している場合では無い。ミワのことを思い出し、

「サトル、ミワは、一緒じゃないのか」と聞いて見た。
サトルの話では、ここから少し離れた、大きな川の近くに村があって、そこに居るとのことだ。ぼくは、少しほっとした。三人がそろっていれば、この窮地をなんとか脱出できるかもしれない。
七、八人の男たちが、解体したヒグマをそれぞれ、担いで運ぶつもりのようだ。リーダーらしい男がぼくたちに近づいてきた。他の男たちより体格もよく堂々としていて、首からヒスイのような宝石や、何かの貝のようなものをジャラジャラとぶら下げている。
「オマエハ　サトル　サン　ノ　トモダチ　カ」と聞いてきた。それには、サトルが先に答える。その男もカイと言い、ぼくと同じ名前の少年の父親のようだ。少年は、カイ　ジュニアと言うことになる。このグループの親方だ。
村へ向かう途中の様子から、サトルは、その野球の遠投の技を認められて尊敬されている村のお客さんのようだ。ぼくは、そのお客さんの友達ということにおさまった。ミワの無事を見るまでは心配だ。

近くとは言え、道のない山林を歩き続け、村についたのは、夕方、近くだ。大きな川の傍の高台に、数十の小屋が見えた。ぼくの少ない知識でも、縄文期の小屋のようだとわかる。広い意味で、サトルの言う古代も正しいかもしれない。なぜ、ぼくたちは、縄文期に居るのだろうか。二次元と三次元、さらに高い次元の空間は、どこかで繋がることがあると聞いたことがあるが、ぼくたちは、あのピラミッド型の温室の中で、そんな空間に接してしまったのだろうか。時間旅行者と言うことか。
村に入ると、ぼくたちが注目されていることは間違いないが、リーダーが隣にいるせいで、遠巻きにぼ

くたちを見ているだけだ。
女性も男たちと変わらない服装に見える。
いつの時代も同じだが、装飾品のようなものを身に付けている。女性たちが集まっている輪の中から、見なれたジャージを着たミワが手を振る。
「カイ、こっちにきて、早く」と屈託なく叫ぶ声がする。彼女は、ぼくたちが置かれている状況について、理解しているのだろうか。

「カイ、この土器を見てよ、完全な形の土器よ」
正に、教科書の出土写真でしかお目にかかれない品物だ。
「続縄文（ぞくじょうもん）期に間違いないわ。少なくとも擦文（さつもん）期の前だわね」ミワの見たてである。ここが、ぼくたちの町の古代であるとすると、今いる高台の下を流れる川は、尻別川で、その位置関係から、ここが、図書館に近い小学校の校庭付近ということになる。ミワの説明では、縄文期には、海進が続き、つまり、ぼくたちの時代の陸地の一部は、湿地か、海の中ということだ。また、川も、ぼくたちの時代より水量豊かで、川幅はかなり広かったそうだ。この高台は住居としては安全で良いのかもしれない。

そういえば、今は町道だが、駅から道道と国道を横切り、尻別川へ下る道路が川であったと聞いたことがある。

「続縄文期と言えば、本州では農業も盛んになった飛鳥時代なのよ。それなのに、北海道は、狩猟を中心とする縄文時代に続く時代なの。六世紀から七世紀の続縄文時代かしらね。」
どこで、どうすれば得られるのか知らないが、ミワは、この種の知識や情報は、いつも思うが驚くほど豊富だ。

「六、七世紀と言えば、律令制度か・・・な」
ぼくも、歴史の知識を披露してみたが、やめておくべきと後悔した。
「そうよ、続縄文期とすれば、安部比羅夫（アベノ　ヒラフ）の遠征があった時代ね。」さらに、東北、北海道、からサハリンまで進んだという「北征」があったことを、たっぷり時間をかけて聞かされたのだ。
こんな時は、サトルが来てくれて大いに助かった。いや、体力勝負のこの時代では、サトルさま、さま、というところだ。

「カイ、ミワ、ここの親方が御馳走するから来いというけど、どうする」
勿論、ぼくたちは、お腹もすいている。すぐに賛成した。七月とはいえ、そろそろ夕闇が迫っている気がする。村の真ん中あたりに、たき火がたかれており、みんなが集まって食事のようだ。
今日、解体したヒグマの肉らしいものもあったが、ぼくは、木の実らしいもので済ませた。サトルは、

調子よくムール貝のような二枚貝を御馳走になっているようだ。お腹を壊さなければいいが。

祭壇のようなところに、ヒグマの頭部分が飾られていて、ぼくには気味悪いが、ここの人たちは、うやうやしく、崇めるようにしている。

宴もたけなわと言うのだろうか。サトルは、みんなから頼まれて、遠くへ投げる方法、つまり野球のフォームを教えることになったようだ。

まッ・・・、縄文時代にきて野球教室というところか。調子のいいやつだ。

ぼくと、ミワは、今後のことについて話し合った。こういうことを相談できるのは、やはりミワしかいない。

ゆっくりと話をきりだした。

「ぼく、さっきから考えてみたけれど、あのピラミッド型の温室で、どういうわけか知らないけれど、時空間の特別な場所と出会って、千五百年ほど前の時代に来てしまったと思う。きみは、どう思う。」

ミワもぼくの意見に同意してくれた。

「どうしようか、これから、ぼくたちは、元の世界にもどれるだろうか。」

そこまで言って、ぼくは少し後悔した。夕闇の中で焚き火を前に、女の子に不安な思いをさせてしまっ

たからだ。ミワは、グスンと鼻をするようなしぐさをした。たき火の明かりで、きらりと目元が光るのが見えた。やはり、心細くなって、涙ぐんでいる。

「ここから、二十キロほど上流の隣町に環状列石、ストーンサークルがあるはずだ。ストーンサークルは、特別な場所と言われる。明日、そこへ行ってみよう。きっと何とかなると思う。」ぼくは、励ますように少し力をこめて言葉を選んだ。

いつ来たのか、ぼくたちの話を聞いているふうだった親方が、ミワの様子をみて、「ソノ　ストーン　サークル　ハ　イシ　ノ　ナランダ　バショ　カ」と聞いてくれた。

親方の話では、そのような場所があり、船で川を遡れば近いと言う。ミワの話では、縄文期の海進と原生林の保水力のおかげで、意外にも川を使った移動が容易であり、縄文人の活動範囲も広く、活発だそうだ。勿論、サトルにも、ぼくたちの計画を話した。彼にしても、いくら縄文人に人気者とは言え、家に帰りたい気持ちは一緒だ。

後で、聞いた話だが、サトルは、カイ　ジュニアが、オオカミに襲われそうになったところを、得意の野球のコントロールとバットスイングで追い払ったそうだ。投げる、打つという動作は、古代から人間が生きるための基本的な技術であったと分かり、納得してしまった。

学校の教室に良く目標として掲げられている「生きる力」の優等生が、意外にもこの時代ではサトルである。

ぼくたちは、シンプルに考え、行動することが大事なのかもしれない。それから、生きるために狩猟生

活をするとはいえ、感謝の気持ちもだ。獲物を捕ると言う生産の活動も、消費と同じことなのだから、お礼する気持ちを忘れないということだ。生産と消費はつながっている。

縄文時代でも、朝は、気持ちの良いものだ。羊蹄山の景色も電柱や建物の屋根が見えない、人工物がなにも遮らない風景に切り取ると、素晴らしく新鮮だ。ぼくたちの時代の警察の駐在さんの坂を下ると、観光案内所兼レストランとの間に尻別川へと注ぐ渓流があった。

ぼくたちは、渓流沿いに尻別川の本流へ向かった。

ぼくたちの現代で、河川敷のサッカーグランドやパークゴルフ場になっているところは、すっかり本流が広がり川幅が広い。

ほどなくして、小さな船がいくつかつながれている入江がある。木をくり抜いただけの、カヌーのような丸木船だ。

「サトル　サン　タチハ　コチラノ　フネニ　ノッテ　クダサイ」と親方は、一方の船を指差した。ぼくたち、三人は、直ぐに乗り込み、親方がゆっくりと船をこぎ出した。

カイ　ジュニアと三人ほどの若者がもう一つの船に乗り込み先頭を進む。

遠くのチセヌプリやアンヌプリの山並だけを見ると、ぼくたちの時代にいる気がするけれど、近くのうっそうとした林や湿地を見ていると、現実に引き戻される変な感じだ。ミワとサトルも同じ気持ちと思うが、あえてぼくは言わないことにした。よけいな不安をさせたくない。

二十分ほど上流へ進んだころ、
「見ろよ、カイ、今、水面を大きな黒い生き物が動いた、恐竜だったらどうしよう」どうやら、サトルは、白亜紀かジュラ紀と間違えている。古代といっても、縄文期にそんな大きな生物はいないというのに。
「大きな鮭科の淡水魚、イトウはいると思うわ、私たちの町でも少し前まで、釣ることができるほど生息していたもの」
上空には、大きなカモメが数羽、旋回している。

「カイ、大変だ、こちらに向かってくる」
サトルが叫ぶ。あと五メートルくらいだ。このままだと、ぼくたちの船に横から突進される。
「岸を見て」ミワが指さす。エゾシカの子どもが、水をのんでいるのだ。この黒い物体は、イトウだとしたら、小動物も狙うというのは、ほんとうなのだろうか。
ぼくたちは、その巨大な魚の進路をふさいでいる。まずい。

その時、サトルが、ポケットにいつもいれている、野球のボールを取り出し、シカの足元めがけて投げた。スローカーブだ。
ナイスコントロールだ。シュルル・・と風きり音に、
シカは、気配を感じて、森の中へと消えた。と同時に、大きな黒い物体の影も川底へ深く沈んだ。助か

ったのだ。

これが、自然体験のインターンシップだったら、スリルがあり、どんなにか楽しいのにとぼくは、不真面目な想像をしてしまった。

それを見ていた、先頭の船のカイ　ジュニアが　歓声を上げた。サトルは、すっかり得意になっているのが頬の上気した様子から分かる。

それにしても、川幅はやたらと広く、尻別川はゆったりと流れる。テレビ番組でいつか見た、外国の大河のようだ。

対岸の川べりに、今度は、大きな角のオスのエゾシカが数頭、水を飲んでいるのも見える。周囲にはエゾエンゴサクが群生している。

やがて、ぼくたちの時代の隣町付近の山並が見え始めた。親方は、右岸に船を付けるように指示した。ここからは、少し山道となるだろう。

「オマエ　ココデ　マテ」と親方は、若者の一人を見張りに残す指示をした。

その時だ、ヒューンという空気を切り裂く音、

弓矢が、ぼくの近くのヤナギの木に突き刺さる。またも、背筋に冷たいものが走る。身体が硬直した。

「フ　セ　ロ」親方が叫ぶ。
対岸から、二そうの船に数人の男たちが乗って、こちらに向かってくる。気味の悪い奇声をあげている。
「親方、ナタをぼくに貸して」サトルが、素早く体を低くして、サイドスローで、水面をギリギリにナタを投げた。
シュッ、シュッという不気味な音と共に、向こう岸近くの船の舳先に命中して突き刺さった。
彼らは、何が飛んできたと思ったのだろうか、恐れて、船にうつぶして、倒れこんでいる。

「イマ　ノ　ウチ　ハヤク」と親方がみんなに声を落として指示し、ぼくたちは、茂みの中を隠れながら、なるべく岸から離れた。
少し、高台まできて、川を見降ろすと、ちょうど、彼らは川の中州を過ぎようとしている。
「どうしよう、こちらの岸まできて、追ってきたら、逃げられるかしら」ミワは、不安な様子で聞く。
「ヤツラ　ハ　キタ　ノ　カイジン　ダ。　クマ　ヤ　シカ　ノ　ケガワ　ガ　モクテキ」
ミワの解説では、カイジンとは、多分、続縄文期に出現したオホーツク人のことではないかとのことだ。
彼らは、サハリン方面から、海岸線に沿って、多くは北海道のオホーツク沿岸へ南下した狩猟をする人たちで、主に内陸部を中心とする縄文人と住み分けしているそうだ。やがて、彼らは利尻、奥尻、さらには佐渡まで海岸沿いに南下したという説もある。
内陸までくるのは、珍しいそうだが、オホーツク人にもそれぞれ都合というものがあるにちがいない。
現に、今、こうして、ぼくたちを威嚇しているのだから。

そんなことを思案しているうちに、太鼓やカネの音がして、下流から少し大きな船の一団が五そうほど現れた。
オホーツク人たちは、あわてたように元の対岸に引き返していく。
「アベノ　ヒラフ　サマ　ダ」親方が指さす。ぼくは、昨夜のミワの解説があったので、すぐに納得した。サトルは、「ヒラフ・・・誰だよ、カイ」とぼくに聞く。ぼくは、後で教えてやると言って笑った。遠くから良く見えないが、船のへさきに立つ鎧のような武具をつけた男が、多分、ヒラフだ。ミワは、もう少し良く見たいと立ち止まるのを、ぼくは、強引に手を引いて、急がせた。
ミワは、人気の大河ドラマか、時代劇の男優を想像しているのかもしれない。そんなはずないと思うが。ミワの幸せのために、だまっていた。

それより、今のうちに、ストーンサークルを目指さなくては。
「ミンナ　イソゲ」と親方の号令が飛ぶ。ぼくたちは、それに従って道のない林の中を進んだ。

一時間弱ほど、ただ歩き続ける。
あった。林が急に開け、目の前に蝦夷富士ともよばれる羊蹄山が出現する。南の方向に昆布岳、北の方向にチセヌプリがある。これらの山を結んだ正三角形の中点に、このストーンサークルが位置するはずだ。

その時、西から急に雲が流れ出て、ぼくたちを覆うように頭上で止まる。ぼくたち三人は、ストーンサークルの真ん中に立った。
親方たちは、林の中から不安そうにぼくたちを見ている。やがて、白い光がぼくたちを覆うようにまばゆく光る。ぼくは、カイ　ジュニアと親方にお礼と別れの合図のつもりで手を振った。サトルもなごり惜しそうな目をしている。ぼくたちは、一瞬、スウーと、上空に引き上げられる感触と、甘く優しい香りを感じた。

親方たちには、ぼくたちが、空中へ上がるように見えたと思う。後志地方北部の余市町のフゴッペ洞窟の岩に刻まれた「翼のある人」のようにぼくたちのことを見たかもしれないと、勝手な想像をしてしまった。
後でミワから聞いた話では、ストーンサークル（環状列石）は、北海道全体で二十五か所、登録されており、そのうち十八か所は、後志管内に、さらに半分の九か所は、小樽、余市近辺にあるらしい。後志地区は、空間が接合する特別な場所なのだろうか。

十一　二日目の発表

翌朝、当然だが、ぼくたちは、昨日と同じ道を通って図書館へ向かった。これもまた、昨日と同じように、館内の掃除と本の整理を終えて、セミナー室で待つ。

昨日、ピラミッド型の温室で目が覚めたことは、三人ともお互いに良く覚えていたが、あえて触れないことにした。ぼくたちは、やがて、自分で理解できる日がくるにちがいないと思うからだ。サトルは、あれから、時々何か言いたそうな様子をするが、やはり思いとどまっているようだ。ミワは、ぼくと同じ気持ちだと思う。

「キャラメルさん、遅いわね」最初に言い出したのはミワだ。

「あの化け猫・・・」とサトルが言うと同時に、ニャーと聞こえたような気がしたぼくは、なんと書棚の一番高い所にいる茶トラ猫、いや、キャラメルさんと目が合ってしまった。素早い身のこなしで、ぼくたちの座る会議用机まで到達するには、時間を要しない。サトルは、きまり悪そうに窓の外を眺めてとぼけている。

何もないかのように、「それでは、本日のワークを始めます。宿題の発表はだれからしてくれるかしら」サトルの都合の悪いのを思いやり、ぼくが先にしますと言った。

キャラメルさんも異存はないようだ。

ぼくは、昨日のワークを整理して、「学校選択における満足」を指標とした戦略を述べた。生徒・保護者が受け取る学校からの満足を、経費に対する進路期待の比で表した整理の仕方だ。昨日のミワの指摘がヒントになったのだが。

「ぼくは、学校にかかる経費に対して、どれだけの割合で進路期待が充分かを、学校満足と考えまし

た。」

キャラメルさんは、話を進めるように長い尻尾で促す。「この場合、経費は計測できると思いますが、進路期待の計測はできますか」

「ぼくは、計測は、それほど重要と考えませんでした。なぜなら、今の課題の本質は、どのような方法で将来の経営方針を立てるかです。例えば、昨日の近くの町村の高校間の関係が明らかになれば良いと思います。将来の不確実情報の中では、どのような方法を選択するかが分かれば十分です。」

「よろしい、続けてください。大人や社会人は、いろいろな不確実なことや矛盾する中で、決断を迫られることがあります。たいてい、社会人は、無意識や経験的に学び、推論や関係性を比較、評価する方法を使っている場合があるのです。例えばその一つは、「フェルミ推定」と言われます。有名な例は、日本に郵便ポストはいくつあるかを、一つ一つ数えることなく推定するようなことです。この場合、ポストの数が正確に分かることが大事なのではありません。同様に、進路期待の正確な数量を計算する必要性は少なく、正確に計算してみても意味がなく、順番が分かればよいのですから」キャラメルさんは、またも気まぐれな尻尾を左右にゆっくりと動かした。

「興味のある人は、後でフェルミ推定をテーマに書いた本が図書館にもありますから、参考にしてくださいね、中高生でも何とか読めると思います。」と、読書案内してくれた。

ぼくは、簡単な算数を使い、説明を続けた。

今、就学総経費と、進路期待の比を学校満足とすれば、進路期待を分子とし、就学総経費を分母として、その比を考える。

「あの・・・すみませんが、それって、割り算ですよね。分数はやめてほしい。足し算か、かけ算で御願いします。ぼく、小学生のときから体質的に割算に拒絶反応が・・・」

「サトル君、比を出すことは、難しくない話よ。」

「ミワは、頭がいいんだよ。ぼくはダメ。」

ここで、説明を中断するのは、心外だが、ぼくは、少しサトルのために解説を追加した。

「比を出すということは、同じ割り算でも羊羹を二等分、三等分するイメージじゃないよ。分母は、定義すること、分子は定義を基に評価することだ。分子を分母で割ると言うことは、分母を定義して、分子を評価すると考えるんだ。」

「益々、わからなくなったよ、カイ」

「だから、２分の１の場合は、２を定義して、１を比較対象にして評価すれば、半分の０．５になると言うほどの意味だ。羊羹を分けるイメージを捨てた方がいいと思う。小学校の高学年から算数がニガテになるのは、少し想像力のトレーニングが不足しているからだ。」

「カイには、だまされて、納得した気持ちにさせられそうだよ」

「算数や数学は、あまり計算ばかり考えるより、本質や哲学的な背景で考えた方が理解できるし、面白いとぼくは思う。だから、今の学校満足も、期待を費用で評価すると考える。期待が大きくても費用がかかりすぎれば、満足は小さいじゃないか。そんな感じの話しだ。細かい計算のイメージではなくて、続けさせてよ、サトル。」
やけになって笑いだしたサトルが少し可哀相になった。・・・でも続けた。

「この学校満足の比率に変化がなければ、学校選択の変化もないものとします。
容易に想像できるように、就学総経費が低く、進路期待が大きいほど、学校満足は大きいので、（分母が小さく、分子が大きいので）学校の選択にプラスの誘因となります。
学校満足は、相対的な比率に依存し、入学者数は、学校満足の関数で表される。関数は、一定の関係があることを表す決まりと考えください。学校満足が変化すれば、入学者数も変化しますから、「風が吹けば、桶屋が儲かる」と言う関係を認めて定義するのと同じです。」

やはり、ここで、サトルが登場。
「風が吹けば、カラオケ屋が儲かるなんてこと、聞いたことないです。」
ミワが、可笑しそうに説明する。
「カラオケ屋じゃなくて、水を入れるタライや昔、死んだ人をいれる棺桶を作る人、桶屋よ。落語の噺、知らない・・・」

街中に強い風が吹くと、そのために目を怪我する人が多くなり、昔は、目が見えなくなると、三味線弾きで生計を立てるしかなくなり、そうすると、三味線を作るために、猫の皮が使われ、猫が減ると、ネズミが増える、ネズミが増えると、桶をかじるので、新しく桶を買い求める人が増え、桶屋が儲かるかも知れないと言うことになる。確か、そんな話だ。

こんな理屈だと、風が吹けば、カラオケ屋が儲かるもいけそうだと、ぼくは思ってしまった。でも、それを考えるのは、後にした。

あッ、猫の姿のキャラメルさんに、猫の皮と三味線の話はまずい。ぼくの言いたいのは、もっと関連がありそうなことだと思い直した。

「携帯電話を使い過ぎると、翌月、母親が不機嫌になる。ケイタイの関数、こんな感じでわかるだろう、サトル」と、ぼくは、慌てて言い直した。

学校満足の増加が、一般的には入学者数を増加させると考えられるので、その関係は右肩上がりの増加関数である。店内にお客さんが、増えれば、ひやかし客もいるかもしれないが、一般に売上が増える関係と同じだ。

ミント高校と、ライラック高校を区分して考えれば、それぞれの就学総経費をミント高校、ライラック高校について、進路期待もそれぞれあるとすれば、ＪＲで通学する必要のあるミント高校の方が、就学

総経費が高いと想定する。勿論、ミント高校の進路期待も高いと仮定する。
それぞれ学校期待満足を同じとすると、相対的に比率が同じと言うことになり、入学者数に変化はない。

「ところで、少子化の進むと言うことは、家庭の収入に変化がないと仮定すれば、子ども一人当たり教育に多くのお金をかけられる。」

「そうね、カイ、少子化は、高校への入学者の絶対数の減少をもたらすから、長期的に一人当たり就学にお金をかけられるわよね」

「そう言うことだ、ミワ、ミント高校では、就学経費の相対的な減少と同じ効果をもたらす。進路期待に大きな変化がなければ、学校満足はミント高校で比較的大きくなり、入学者数も増加となるので、ライラック高校への入学者数が減少傾向へ変化するのはそのためだ。」

「とっても良い説明よ、カイ君。でも人口減少が社会全体で経済成長を低下させてしまえば、実質の所得を減少させ、先ほどカイ君が説明してくれた少子化による所得増加と同じ効果を打ち消すように働く可能性もあるわね。勿論、今は考えないことにしますけれど、いわゆる格差社会の要因も今後は考えにいれる必要があるでしょうね。これは少し難しいので、オマケとして聞いてね」

ぼくは、さらに、レモンバーム高校とカモミール高校を、この話しに入れ、それぞれ区分して見た。レモンバーム高校は、授業料など各助成措置に力を入れているとすれば、ライラック高校よりレモンバーム高校の就学経費が相対的に低く、進路期待が同じとき、学校満足は、レモンバーム高校が高くなる。このため、レモンバーム高校への入学を選択する中学生が増える要因となるかも知れないと考えた。カモミール高校についても、農業関係など特定の進路期待などによって学校満足が高くなる場合、同様に入学選択される可能性が大きくなると思う。

「だから、入学者を増加させるためには、学校満足を高めることが必要となるが、そのために、進路期待を高め、予想就学経費を低下させる必要があると考えます。」

ぼくは、直ぐに補足して説明した。

「でも当面、各経費の助成、補助策の追加は、就学総経費を低下させて、学校満足を高めることは良いと思う。」

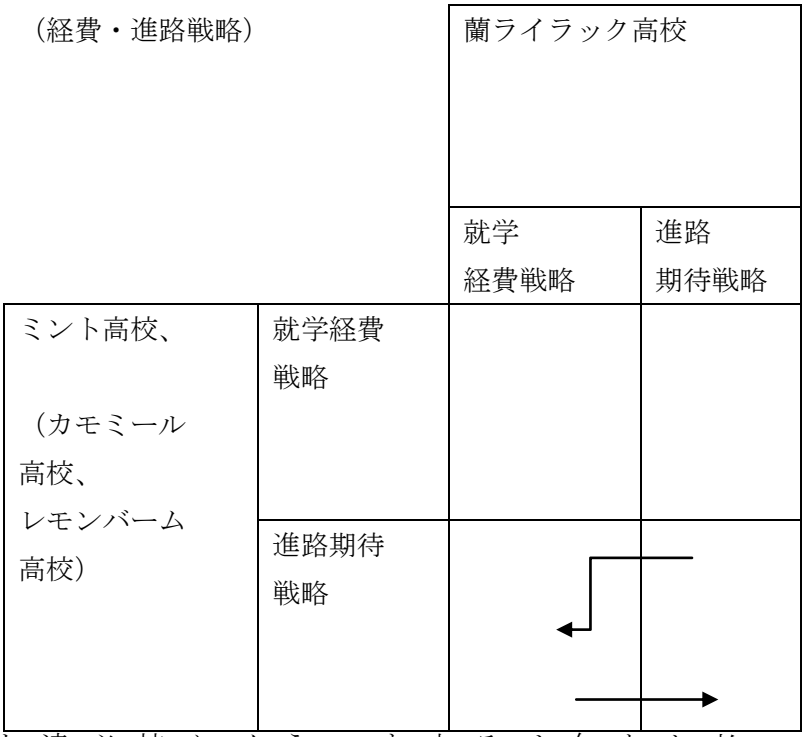
「そうすると、隣町どうしのする助成や補助は、・・・それって、ハンバーグ店の低価格競争みたいね。百円セット始めました、みたいな」とミワが指摘する。

ぼくは、直ぐに応じた。「そう言われても、短期的には必要な場合もあると思う。」

「そうね、これは、短期の戦略だわね。」とキャラメルさんも同意する。

ぼくは、説明を続けた。

ライラック高校の低価格化の戦略は、レモンバーム高校、カモミール高校には一定の逆選択の効果が期



待できる。つまり、ハマナス中学校からレモンバーム高校を選ぶ人の中には、交通費を支払っても、な

お就学経費が、ライラック高校の方が大きいと考える人もいるからだ。

勿論、ミント高校を選ぶ人の一部を、撤回させることも期待できるが、同じ普通高校であるため、進路期待の要因が大きいとすれば、中長期的には、進路期待を高めることを準備する必要が大事になる。

「あのう・・・せっかくの話に水をさすようですけれど、ハマナス中学の生徒数は、ライラック町の人口の減少に合わせて、どんどん少なくなるから、いずれにしても、普通高校であるミント高校へ行きたい人も一定数必ずいると思うのだけど」

遠慮がちに、サトルが珍しくもっともなことを言う。ぼくも、同感だ。

ここで、ぼくは、ホワイトボードに図を書いて整理してみた。

「よく整理されています。ところで、進路期待の内容ですけれど、進学や就職だけではなく、高校でのクラブ活動や友達との学校生活なども期待に含まれることもありますわね」

キャラメルさんは、そう助言してくれた。

ぼくも、その点は考えないわけではない。

個別の生徒が学校を選ぶ理由には、例えばライラック高校に進学しないという人は、もしかすると中学の同級生の中に、とってもニガテな人がいて、あえて別の高校を選ぶ場合もあるかもしれないと思うからだ。

・・・でも、ぼくは、個別の都合を別に置いて、考えることにした。

「ライラック高校とミント高校を例に、とりうる戦略の可能性を説明します。

現在は、普通高校ですが、進学率の高い同じ普通高校のミント高校への入学も比較的容易になって、ライラック高校も普通高校として大きな変更を行っていないとすれば、（前のページの図を参照してください）通常は双方が進路戦略の場面上であるが、先に説明したように明らかに、ライラック高校が不利になるので、ライラック高校は、経費戦略へ移るとします。

町の補助施策による就学総経費の低減からライラック高校の経費戦略と、ミント高校の進路戦略の場面に矢印のように移ります。」

しかし、中長期的に、ここでもミント高校が利得を得る。なぜなら、少子化などにより教育にお金がかけられるから、今後、ライラック高校の就学経費の一部補助などの経費戦略は、やがて相対的に相殺され、場合により無効となり解消される可能性が高く、進路戦略ステージにもどり、長期的には双方が進路戦略で競合することとなるかもしれない。双方が普通高校ステージにあるかぎり。
短期的にはライラック高校は地理的優位、ミント高校の進路期待の優位により均衡するが、それは中長期的な安定を保障するものではない。中長期的には、ハマナス中学校の卒業生数の絶対的な減少から、このままの状態でライラック高校も双方進路戦略の場面へ復元すると不利なステージとなる。

「だから、ライラック高校が取るべきは、進路戦略の場面のための中長期戦略を立てておくことです。このことは、必ずしも大学進学だけを目指すという意味ではなく、生徒、保護者が納得、満足するものであれば十分であると考えます。カモミール高校に対する戦略も、レモンバーム高校に対する戦略もこの図で説明できると思います。」

「カイ君、よく整理していただきましたね。ところで、・・」
やはり、キャラメルさんの質問は鋭い。
「ここが、大事なところなのですけれど、生徒・保護者が納得、満足するというところが、難しそうね。」
「ヒントは、あります。」

直ぐに答えた。そう、指摘されると、考えていたからだ。
「昨日、キャラメルさんから、図書館の仕事のことを教えていただいて、思ったのですけれど、例えば、自分で学ぶ力をつけさせることを目標の一つにしてはどうかと思います。」
「それは、どういうことかしら、もうすこし聞きたいわね」
キャラメルさんは興味をもってくれた。

ぼくは、ノートの最後にメモしたことを見ながら説明をはじめた。それは、普通高校である条件を変更しないで、進路期待を高めるための一つの方策として、大学進学率で競合するものでもない。
「ライラック高校は、規模も小さく、進学校でもなく、かといって小さな町に就職先も多くはありません。普通高校ですから町の基幹産業に直接役立つ技術を直ちに得ることも難しいと言えます。」
サトルがじれったそうに口をはさんだ。「それじゃ・・・どうするの、どうしようもないじゃないか」
「まってよ、サトル君、カイ君のお話は終わっていないでしょ」とミワがたしなめる。

「小規模なまちの図書館は、しっかりと方針を立てたうえで、ソウゴ　タイシャク（相互貸借）というので、不足する資料をおぎない、人づくり、まちづくりに関わる活動もできると説明されたと思う。ぼくたちも図書館のように考えるべきだ。」
サトルが、またも口をはさむ。「いよいよぼくには、訳がわからない、カイは、図書館と高校をいっしょに考えているように思う。」

「今は、どんどん情報が増えたり、変化したりする時代です。情報を蓄積することは、コンピュータのハードデスクがしてくれ、ソーシャルネットワークもあります。でも、情報を使う力が大事だと思うんです。そのために、学び続ける力をつけることも。仕事につく人は、勿論、専門学校や大学へ行くにしても、学び続ける力をつけていると、いないとでは大きな差になるからです。例えば、ぼくたちの町の基幹産業の農業は、今では、生産、流通、販売までの情報を農業者が活用できなければならない時代と言われる。一次産業、二次産業、三次産業を掛け合わせた六次産業化とか、そういった力は、昨日、教えていただいた図書館で資料を使って調べる学び方の中にあると思うんです。」ぼくは、思ったことを一気に説明した。

「それに、最近では、インターネットなどを活用して、自分で生産から流通、販売戦略を立てて、活動している町の農業者も実際に出てきています。」ミワが助け舟を出してくれた。

キャラメルさんは、少し満足そうに目を細めて、少なくとも、ぼくにはそう見えた。「はい、結構です。図書館のことを理解していただいてありがとう。今のカイ君のお話しには、データや情報、知識を総動員して新しい場面を定義し、枠組みや仕組みを考えだすという経営戦略、ブルーオーシャンと言われるものも入っていますね。そのあたりで終わりにしましょうね。カイ君、後は、自分でまとめてくださいね。」と、優しく付け加えることを忘れない。

ぼくは、つい気を良くして、サトルのことは言えないと思いながら、

「例えば、既に注目される試みがあります。ライラック高校では、ミント高校を地域の中核高校として、教員に来ていただき一部の授業を援助していただいています。出張授業です。」
ミワが付け足してくれた。「英語の授業は、進んでいる生徒と得意でない生徒がいるので、二つのグループに分けて、それぞれの生徒に合った授業をしています。その一人は、ミント高校から派遣された先生です。」

ミワが、珍しく積極的に引き続き発言した。
「ここからは、私の昨日の宿題を発表させてください。今のお話は、図書館のソウゴ　タイシャク（相互貸借）のアイデアと同じです。それと、コンビニの戦略とも同じです。コンビニのお店は、ショッピングセンターほど広い店内ではないけれど、地域の人が求める商品を情報収集して販売するので、大規模な小売店に負けない営業利益を上げています。
町の小さなお店が、大規模なお店と競争するためには、徹底した差別化をして、大型店にない商品を販売する方法もありますが、結局、地域の消費者から選択される有利さ、この場合は地政学的な距離要因などの有利性と近隣社会のネットワークを利用した適切な商品を開発する力が大事だと思うの」
キャラメルさんが補足する。「戦略的な行動は、必ずしも敵対的な行動を選択すると言う意味でありませんね。ここは、とっても大事よ」
いずれにしても、生徒、保護者への調査などとも併せて、進路期待を高めるための手助けする方策を立案し、実施することが、中長期的に学校満足を高め、入学者数を安定化させると、ぼくは理解した。

「町の小さなお店が生き残るためには、短期的に過大な利益を得ることで、売り抜けるのではなく、地域社会の顧客との長期的な信頼関係を強くすることが必要であることは言うまでもありませんよね。価格は、大型小売店と比較して安くはありませんが、顧客が求める、品質は勿論、納得の得られる商品を開発することに専念し、質の高いサービスを目指さなければなりませんから」

「ライラック高校がしている町内施設における各ボランティア活動などは、地域社会との信頼関係、コミュニケーションを強くするための一つの良い方法であると考えます。しかし、それが最終的な目的ではありません。」キャラメルさんは、そう述べて、またゆっくりと立ち上がり、天井に何かいるようなそぶりで、鋭い目をする。

「私、思うんですけど、売り場面積の小さいコンビニが利益を上げているのは、少し離れた大規模な小売店にない満足が得られるからです。そのためには、商品についての情報やネットワークを十分に使っていると思います。足りないものは補完すればいいのです。」

「そうね、全て完結したり、敵対的に考える必要はなく、補完する戦略も大事ね。補完財、また、補完性の原理と言うのがあるわね。ライラック高校の進路期待戦略もそんなところかしら。それから、補完財や補完性の原理は、図書館の経済や政治の入門的な本に必ず在りますから、後で調べてみてくださいね。」とキャラメルさんがまとめてくれた。

ここで、サトルもやっと真面目にワークに参加する気になったようだ。

「ぼくは、読書の高校を創る戦略を提案します。」
相変わらず安易なやつ、とぼくは思ったが、キャラメルさんは、否定するそぶりもなく優しく話を進めるように、また、自慢の尻尾を振ってみせた。
「昨日、宿題にいただいた、学ぶ力のことは、難しくてわかりませんでした。でもライラック高校のぼくたちは、いろいろな夢や希望をもって来る生徒がいます。そして、ミワやカイ、それからキャラメルさんのお話を聞いて、今の時代は、学び続ける力を付けているかどうかということが、大事だと思いました。将来、どのように新しい情報や知識が生まれても対応しようとできると思うからです。それには、いろんなことに興味をもって、情報や知識を得る、読む習慣と力をたくさんつけることでもありますから、読書の高校です。そう言えば、読書はヨミカキと書くから、書くことも大事かな。」

ぼくは、サトルの今の思いつきらしい「読書の高校」戦略の提案は、始め単純すぎると思ったが、シンプルさも大事かなと説明を聞いて思ってしまった。サトルは、ぼくには無いものをもっていることも認めたい。
「この辺では、ミント高校とライラック高校の二校が普通高校です。カモミール高校やレモンバーム高校の町の中学生にも、普通高校のライラック高校を選んでもらえるようにすることは、決して意味がないことは無いと思います。地域に子供の数が少ないと言って、諦める必要も無いと思う。」と、サトルが締めくくる。
「ミント高校がショッピングセンターなら、ライラック高校は、小さくても営業利益を上げるコンビニ

というところね」と、ミワもサトルのために解説した。
キャラメルさんは、満足そうなときにする目を細めるしぐさをして付け加えた。
「情報の進歩や変化が激しい現代では、学校の一時期だけに「学び」を集約するのではなく、適切な時期に何度でも「学び」ができる習慣、方法、手段をもっていることが、子ども、生徒、そして大人となって大事になります。図書館はそのためにあります。」

ぼくは、あえて質問してみた。
「でも、キャラメルさん、学び続けることは、現実に難しいことです。」
その質問を予想していたように、
「学びは、興味や関心が惹かれるような、楽しいことも大切です。楽しくなければ、好奇心が育っていなければ、学び続けることもできません。」
ミワも感慨深く、懐かしい思い出をさがすように、
「子どものころに、本からワクワクやドキドキを教わって、自分でも積極的になれた気がします。」
キャラメルさん、嬉しそうに答えてくれる。
「それは、とっても良いことです。でも、それだけでなく、将来は多くの人と関わり、支えられて生きていることを忘れないようにしましょうね。人間だけが生命でないことも。」
「猫や犬とも仲良くということですね」と、サトルは茶々を入れる。ぼくは、サトルが、真面目に考えているのかどうかと、こんな時は疑ってしまう。

キャラメルさん、聞いていないかのように、話を静かに始めた。

「英国のウイリアム・ユアートは、「自己教育の機会」に注目しながら、公共図書館の意義を述べています。どんな年齢、境遇、時期にかかわらずに、興味や関心のある事柄に出会い、自ら目的意識をもって「学び」始める時が、最も適切で、効率的に学習できる時です。そのためにも、日頃から、図書館利用などを通して幅広い読書の習慣があることは、「学習力」となります。経済協力開発機構（OECD）による調査で長く「読解力一位」となったフィンランドでは、「学び学習力」と言います。」

ぼくたちの図書館インターンシップは、このようにして終わりに近づいてきた。インターンシップなので、図書館の掃除や本の整理ばかりさせられると思っていたが、キャラメルさんは、どうやら、図書館の考え方を使って、社会に出るぼくたちのことを応援しようとしたのかもしれない。勿論、図書館のセンショ（選書）やソウゴ　タイシャク（相互貸借）制度などもしっかり学ぶことができた。

十二　図書館の使命

「いよいよ、今回のインターンシップは終了します。最後に、図書館の仕事、私たちにとっては使命について、ご説明しなければなりません」

こういう時に、サトルは、口をはさむから、だめなやつと思える。

「図書館は、本をタダで貸してくれるところです。漫画の本もあるし、部活の後に開いていると便利です。」

サトルのやつ、今までのレベルの高い話を本当は、理解していなかったのだろうか、とぼくは、がっかりした。

相変わらず、キャラメルさんは、気にしないようだ。

「少し難しい法律がでてきますが、聞いてくださいね。みなさんが良く知っている日本国憲法の中心的な考え方に、思想、信条の自由があります。そこには、直接の言葉はありませんが、知る自由を含むものと解釈されています。」

「どうして、知る自由が関係するのですか。」

「その質問はとっても大事よ、カイ君。」

「民主的な社会に参加すること、自由な社会に生きるためには、少数の人が決めるのではなくて、多くの人が参加して、考えや意見を述べ合うことが大事よね」

「それは、よくわかります。」

「そのためには、自由に本を読んだり、調べたりして、それから話し合って、自分で考えることができなければならないでしょ」

「だから、知る自由が無いと成立しないということですね」

「そのとおりよ、一方で、教育の基本を定めている教育基本法では、教育、文化の具体的な発展のために、学校教育と並んで社会教育を重視しています。」

「教育には、学校で学ぶこともありますけれど、家庭も含め地域社会の中で学ぶこともあると言うこと

ですね。」
「ミワさんも良く理解しているようですね。そのとおりよ」
「この社会教育法に基づいて、トクベツホウ（特別法）として図書館法が定められています。この法律では、無料で本などの資料を誰もが、自由に読むこと、知ることができる施設として公立の図書館を想定しています。」
特別法は、キャラメルさんの説明では、大学の法律学の講義などで詳しく習うそうだ。
「基本的な法律に全てを書くことはできないので、そのための具体的な内容を書いてあるトクベツな法律があるから、そちらを見てね、と言う意味です。皆さんには少し難しいかしら」と、キャラメルさんは、丁寧に説明してくれる。
よくある「詳しくはＷＥＢで・・・」と同じ、そちらを使ってほしいという意味らしい。勿論、基本法に書いていないことは、特別法を優先して解釈する。

「・・・ですから、図書館の本当の仕事は、タダで本を貸すことではありません。そのことは、誤解しないようにしてくださいね。」とキャラメルさん。
ミワも直ぐに応じた。
「それでも、一般の人は、読みたい小説やベストセラー、興味のある実用書を、無料で借りられるので、感謝していると思います。」

夕暮れも、早くなったようだ。小学生の親が図書館に迎えに来る車のエンジン音が三重奏のようだ。キャラメルさんもすぐに応える。

「ミワさん、図書館のもう一つの特徴のお話をしましょうね。図書館は、資料や施設を提供しますが、どのように学ぶかは原則として個人の自由であるべきと考えています。ですから、利用者の皆さんが自由に、興味、関心にまかせて本を手にとることができるように願っています。」

「つまり図書館が指導したりすることは原則としてないと言うことですね。」

「利用者の興味、関心に寄り沿って、自主的に資料を利用できることを大事にしています。そのための手助けは全力でします。また、原則として、裁判所から出版停止などの判決がでていない限り、国民は、どのような資料も読む権利があります。昔は、国家に都合の悪い情報は削除される検閲の制度があり、事前に読む本が指定されたこともありました。」

キャラメルさんは、少し低い声の口調で説明する。

「明治憲法の反省から、日本国憲法では、はっきりと検閲を禁止していることは知っています。」キャラメルさんの厳しい口調に応じるようにミワも補足した。

それから、ぼくたちは、キャラメルさんと、カウンターのお姉さんに何度もお礼を言って、インターンシップを放免された。

既に、午後五時を回っている。少し、真面目にやりすぎた感じがするが、キャラメルさんとのワークは、ぼくたちの心の深い言葉を目覚めさせ、自分とも対話できたようで、充実感とほどよい疲労を感じてい

た。
来るときとは違い、ぼくと並んで帰る二人も同じ思いに違いない。夕焼けの空のせいか、ミワとサトルの顔も少し高揚しているように見えた。

十三　ぼくだけのワーク

図書館からの坂道を少し下ったところで、ぼくはお弁当を忘れたことに気づく。
「ミワ、サトル、図書館に忘れ物をしたみたいだ、先に帰ってくれ、明日、学校でまたな」
ぼくは、二人にそう言って、また、もと来た道を引き返した。
「カイ君、また明日、取りに行きなさいよ」ミワは、ぼくの急ぐ背中にそう声をかけてくれたが、やり残した仕事のようで、ぼくはその言葉を振り切っていた。
「ミワ、オレと二人きりで、仲良く帰ろうぜ、明日、学校で噂かな」サトルが、またふざけた声で茶化す。

ピラミッド型の温室の前まで来たときだ。また、茶トラ猫と、今度は、ヨモギ猫も、温室の中へ消えたような気がした。夕暮れも近づき、ハッキリとは見えない。
ぼくは、今度こそと思い、温室の中へ猫を追い、駆け込んだ。

温室の中に入ると、既に、白い光が放射状に輝くのが見え、同時に、甘い香りが空間を満たして、ぼくの意識は分散するように消えた。

「一年半ぐらい前かしら、あなたが中学生のころ、ここに来たことを覚えているわよね」
そんな耳元でのささやき声と、微かに優しいラベンダーの香りを感じた。
頬が冷やりとする・・・。床にうつぶしているのだろうか。どうやら今度は野原ではない。多分、人工的な構造物のような感じ。
かつてのあの時、図書館の休憩室で白い煙と甘いラベンダーの香りに気を失い、夢の中のことのように思っていた記憶が蘇る。いや、自分の中で、そう思うことにしたのかもしれない。
「あの時は、館長さんもいっしょでしたわね、・・・」
ぼくは、勇気をだして、目を開けて起き上った。やはり、聞き覚えのあるその声の主は、
「心配しないで、あなたには、また、少しだけ協力していただきたいことがあるのよ」
今は、猫の姿ではないキャラメルさんが、ぼくの前にいる。不思議な感じだ。薄茶色のピッタリとしたスーツを着ている。
「ミワやサトルは、一緒じゃないのですか、ここはどこ?」
少し落ち着いてから部屋を少し見渡すと、あの時と同じ、まるでＳＦ映画の宇宙船のようなシンプルなグレーの壁と計器類のように見えるものが、ところどころに配置してある。やはり、以前に見たことの

ある風景だ。
座るようにうながされ、その方向を見ると、ゆっくりと床がせり上がり、少し硬めの長いすのようなものが現れた。
ぼくだけ、どうして、こんな目に合うのかと、心の片隅で訴える。キャラメルさんは、ぼくの不安を知っているかのように、ゆっくりと言葉をつづけた。
「ごめんなさいね、カイ君の時代から五百年ほど後の時代、二十六世紀のシリペツ市の図書館なのよ」
「シリペツ市ですか」思わず繰り返してしまった。
シリベシ（後志）のことかと見当をつけた。多分、ぼくたちの時代の町村の区分が少し拡大したのだろうか。
慣れたせいか、猫の姿の方がよっぽど話し易い。
三角錐の変わった形の天井を見るふりをして目をそらす。
「ここは、市立議会図書館の私の研究室なのよ」自家用車が十台も置けそうな駐車場のような殺風景なところのように見える。
「議会図書館ですか、ぼくたちの時代には、国立国会図書館というのがあるそうですけれど、この時代には、市立議会図書館というのもあるのですか」
今から四百年前、二十二世紀の初めには、図書館は、主に自治立法や自治体議会を支援する組織へ移行するようになったらしい。
「図書館は、本来、資料の組織化など・・・、そうね、本などを集めて、分類し、目録を作成したりし

て整理し、保存することを専門としてきたのですけれど、十九世紀後半の情報革命の後、二十一世紀後半ごろには、コンピュータなどの技術の発達により情報の組織化を、さらに知識の組織化へと図書館の機能が進んだと、歴史の時間に教わることになるわね」

「それが、どうして立法機関と関係するのですか。図書館は、この国では教育分野に属するはずですけれど」

すらりと伸びた長い脚をもてあまさないように、オシャレなカフェにあるような背の高いチェアーに座ったキャラメルさんは、足を組みなおす。

「やがて、自治体は、増加するデータや情報を集めて効率的に整理、保存することに関心が集まり、図書館とは別に、情報をデジタル化したセンターを設置するようになったの、簡単に言うと・・・」

情報革命の進展は、生産される膨大な情報をどのようにして、効率的に管理し、整理するかに関心のある人たちが、デジタル化さえすれば大量に情報を処理できるサーバーのあるデータセンターの建設を進めたわけだ。

「・・・でも、資料や情報、知識の組織化を目指す図書館と、情報センターは、同じではないですか」と、ぼくは、素朴な疑問を返した。

「そうね、同じ所も多いと思うけれど、情報を効率的に処理するためにコンピュータ処理や、デジタル化は、それを簡単に端末機にダウンロードできるようになり、情報を集め、整理し、保存をとても便利にしました。」

「それは、誰もが手軽に情報を得るために、とっても良いじゃないですか」

「勿論、そうですけれど、データ化やデジタル化に頼り過ぎると、課題が生じます。例えば、致命的な欠点は、書き換え可能ということかしら。ある情報がデジタル化された次の瞬間に変更されているかもしれません。」
「確かに、紙の資料は、原則としてそういうことはできないかも知れない。でも、改正することは問題ないですよね」
「少し極端なお話をしますと、誰かが意図的にデジタル化した情報全体を一定の方向に書き換えようとするかも知れません。それは、ゆっくりと、時間をかけてかもしれないけれど」
「抽象的で、ぼくにはイメージできません。キャラメルさん」
「それじゃ、こういうのはどうかしら、インターネットの検索エンジンと言うのがいくつかありますね」
「何かを調べる時に、いつも使っていますけど・・・どうかしましたか」
「それって、大体の人は、キーワードを入れて、先頭の行に出た項目をクリックすることが多いと思うの」
「勿論、そうですよ、多くの人が利用していることが多いですから、役に立つ情報があることも多いです。」
「そうですけれど、それって、少数意見の情報が切り捨てられてしまいませんか」
「あッ、」ここまで来て、ぼくは、キャラメルさんの言いたいことが少し分かってきた気がした。
「民主的な社会が少数の意見を良く聞くようにシステムを作ってきた人類の知恵と、違う感じがします。」

「良く気がついたわ、カイ君」
図書館の言う資料の組織化は、図書館の分類表のように誰もが適切に分類された情報に偏りなく接することができる仕組みのことであると実感できる。それは、非効率に見えるかもしれないが、手間ひまをかけても大事なことだ。

ぼくの理解をなぞるかのように、キャラメルさんは、話を続ける。
「やがて、公共の図書館の多くは、デジタル化された公共情報センターへ置き換わるようになってしまい、そこにアクセスすれば、どんな情報でも端末にダウンロードできるという仕組み、ネットワークシステムができたの」
「それで、ぼくたちの知る図書館はどうなったのですか」
答えは、なんとなく予想できるが、一応、質問してみたい衝動を抑えられない。やはり、図書館自体が無くなるか、公共の図書館の中には、それまであった地方議会の図書室を発展させるように再定義して、議会図書館へと移行するところが出てきたということだ。
キャラメルさんは、その市立議会図書館の特任司書監であるらしい。ぼくたちの時代の調査をしているのは、二十一世紀の後半に出された一つの仮説を研究しているためだった。
「私たちは、国立国会図書館のチームと協力して、ある仮説に基づいて、特に空間の特異点が多いこの地区にある図書館で研究しているというわけですの」
ぼくには、少し分かるようで、良く分からない部分も多く、そもそも何でぼくがここにいるのか益々、

疑問が増えてしまった。とにかく早く、帰して欲しいと、ひたすら願った。

「一つ質問していいかしら」

今更ながら気がついたが、少し広めの額、二重の薄茶色の目、ショートカットにした髪のくせ毛さえ魅力的に見える、端正な顔立ちのキャラメルさんは、ゆっくりとした所作で足を組みなおした。

「人は言葉で考え、文字にして残したり、伝えてきたと言うけれど、あなたはどう思うか聞かせてくださるかしら」

当然のことのようだけれど、何か、他にあるのだろうか。しいて言えば、言葉で考えない場合もあるかな。感性と言うやつだろうか、センスと言ったり、感情もそうかな、言葉や言語が不要な状況が多い。

「悲しい時や嬉しいとき、言葉で考えて泣いたり、笑ったりしないですよね、文字は必要ないかもしれない」

「もしかすると、人は経験により考えをパターンにして、言葉や文字を経由しないで、反応できるということかもしれませんね。データや情報は、言葉や文字に変換できますけれど、時間がかかることもありますし」

人の感性、感情は、言葉や文字だけではなく、経験や記憶、もっと遠い記憶、遺伝子によって現れるのかもしれない。縄文期の人々の自然や狩猟したものへの感謝の気持ちが、ぼくたちにも共感できる。と言うことは、ぼくたちの遠い記憶の中にそれが、あるのかもしれない。人間の脳は、まだまだ使われていない領域があると聞いたことがある。知識はどうだろうか。

ぼくの思案とはまるで関係ないように、キャラメルさんの問いは続く。
「図書館は、資料を組織化してきましたけれど、やがて、知識の組織化へと進むでしょうか。そして、生命が繰り返してきたように、その組織化を自らコントロールできるでしょうか」
「いままであまり使えないでいた脳の別の一部を使う人が、長い、長い時間をかけて、少しずつ現れるようになるかも知れない。それが、新しいヒトのシュ（種）かも知れない、ぼくのちょっとした思いつきですれど。そうだ、もしかすると、長い歴史の中に現れた優れた人は、そんなチカラを持った人かもしれない」
キャラメルさんは、満足そうにうなずいたが、少しだけその温和な顔が険しくなり、「いつか急激な変化が起きないことを祈ります。」と、遠い目で独り言のようにつぶやいた。

突然に、研究室のグレーの壁の全体が、夕焼けの鮮やかな赤に染まった。
どうやら、この研究室自体が、立体的な巨大なスクリーンか、三次元ディスプレイのようになっているらしい。
室内の隅の方から、トドマツやブナの原生林が広がり始める。まるで、大森林の中に取り残されたようだ。すでに、数羽のカラスがトドマツのカラス止まりにたむろしているのが、気味悪い。
グルルル、ガウー、ガウー
低いうなり声が森の奥のあちら、こちらに響き渡る。ぼくは、またも縄文期に逆戻りしたのだろうか、

嫌な予感がしてきた。
やがて、声の主が姿をみせる。絶滅したはずのオオカミの十頭ほどの群れだ。黒く光る目が、ぼくたちを突き刺すようだ。
そばにいるキャラメルさんは、たよりになるのだろうか。男のぼくが、キャラメルさんを守るべきなのか。走って逃げてもすぐに追いつかれるに違いない。ズタズタに、体を切り裂かれるのだろうか。
獲物をロックオンしたオオカミたちは、ゆっくりと、しかし確実な足どりで、ぼくたちに近づいてくる。
キャラメルさんは、何かに集中しているようだ。
やがて、オオカミとぼくたちの間に、巨大なツノのヘラジカが現れた。
「ガウー」
右端のオオカミが、そのシカに突進する。シカの鋭いツノがオオカミをけ散らした。しかし、べつのオオカミがまた近づく。多勢にぶぜいのように見える。
「キャラメルさん、今のうちに逃げよう」
「だめよ、カイ君、闘うのよ」強い決意を感じる言葉が飛ぶ。
さらに、二頭のオオカミがシカの背後に回ろうとしている。やられるのか。

その時、突然に、あの縄文期に遭遇したヒグマが、自然に、ぼくのどこかで蘇る。
それと同時に、森の奥から、巨大なヒグマがゆったりと現れる。ゴオー、ゴオーと唸るように威嚇するヒグマ。カラスたちが、怯えて飛び去っていく。ヒグマとシカに挟まれたオオカミは、さすがに、ゆっ

くりと、後ずさりしながら、威嚇した目で、しかし、ちりじりとなって林の中えと消えた。
助かった。
しかし、今のはなんだろうか。
「やはり、あなたにも、勇気とそれを使うチカラがあるのね。」すでに、大森林は消えて、元の研究室にぼくたちは残された。

「さっきのは、いったいなんですか、まさか、ぼくを試すための仕掛けではないですよね」
「違うのカイ君。あなたを試したのではなく、図書館のシステムに侵入しようとした者たちと、あなたは一緒に闘ってくれたの」
「真の勇気、心からの感謝や思いやりは、人間の脳の中で、まだ使われていないチカラを引き出すトリガー（引き金）になると、私は考えているの」
研究者らしく熱っぽく語る。
「私は、子どもたちと、その勇気に、希望をもっているの」
「さきほどお話しした、画期的な仮説は、言葉、感性、超・言語に関するトリガー理論なのよ」

こんなぼくに、どんなチカラがあるというのだろうか。
キャラメルさんが、図書館を案内するというので、研究室の外にでると、ぼくたちの時代の大きな図書館と変わらない光景が目に飛び込んできて少し安心した。

「書架は、五百年後も、やはりあるのですね」期待外れのトーンでキャラメルさんへ感想を言ったら、「アンドロイドやロボットの世界でない限り、紙の資料は使われているの」と、そっけない返事。ただ、職員らしい人が、キャラメルさんと同じような服を着ているのを除くと、一般の人はむしろ、ゆったりとした、縄文期と変わらないシンプルな服をきているのに驚く。

「さっきの闘いは、なんだったのですか。まさか、また戦争が始まったのですか」

ずーと、気になっていた思いをぶつけざるを得ない。

「やはり、一種の戦争かしらね」あっさりと、肯定する。多分、昔のように砲弾が飛び交う戦争は無いのかもしれない。ぼくの考えを先回りするように、「情報の高度な発達は、リアルな戦争を無力化してしまったのよ。その代わり、情報や知識の独占と解放が対立する世界というわけ」

なんとなく、それはそれで、しんどい話のように思う。

「そろそろ研究室にもどりましょうか。お飲み物でもお出しするわ、いかが」

図書館の大ホールらしいところまで来ていた。体育館が二つ、三つ入りそうなドーム状の建物に、書棚が放射状に広がっている。中心部分に、塔のようなものが天井まで伸びているのが、外国の寺院のようだ。

研究室にもどると、ハーブティーらしい華やかな香りのお茶を出してくれた。既に長いすのようなものが床からせり上がっており、少し居心地悪いが座らせてもらい、休んだ。

天井から緩やかな光の帯が下りるような気がした。「また、今度ね、お元気で、さようなら」と言うキ

ャラメルさんの声が微かに聞こえたような気がする。
急激に、疲労が襲う。天井がゆっくりとグルグル回りだすような感じがして、ぼくの意識は放出された光と同調を繰り返しながら消えた。優しい香りに包まれるようにして、体が心地よく、何かに吸い込まれるような感触がした。

十七　エピローグ

その後、ぼくたちは、高校へ戻り、数日後、体育館で、インターンシップの報告を他の生徒たちが保育所や自動車修理工場へ行った報告と同様に、パソコンのパワーポイントにまとめ発表した。
しかし、発表時間は五分程度なので、キャラメルさんとのワークを伝えるためには十分な時間ではない。サトルは、少しそのことが不満そうだったようだが、ぼくには、図書館が教えてくれた知恵に満足している。多分、ミワも同じ気持ちでいると思う。

今、ぼくたちは、担任の教師に指導を受けて、図書館への御礼状を書いているところだ。もしかすると、ぼくたちのほんとうの御礼は、何十年も後のことかも知れない。図書館は、それまで、待ってくれるような気がする。ぼくたちの町の図書館は、そういうところだ。なによりも、キャラメルさんとのワークで、一人、一人の人と言葉、意見を大事にすることを学んだ。

高校二年生の夏休み前だったぼくたちは、あれから一年半後、ミワは、マネジメントや経営学を学ぶ

ためにライラック高校から初めてという快挙で国立大学へ現役合格した。サトルも、信じられないほどの努力と、図書館から希望をもらったに違いないが、体育教員になるため本州の私立大学の教育学部へ進んだ。

ぼくは、論理学や言語学を学ぶために大学の哲学科を目指し、親に無理をいって、再チャレンジしている。予備校の自習室は、鳥小屋のように狭く、両側に座る人を遮る板がある小さな机がいつくも並び、その中の一人として、今のぼくがいる。

あッ、そうだ、ミワの大学とぼくの予備校は、運悪くすぐ近くだ。ミワは、何かと口実をつけて、ぼくの学習指導に来る。彼女は、文科系の科目が得意だからであり、ときどき今でも生徒会の委員長の口調で指示するのが、少し嫌なのだが、彼女は大学に入学後、メガネをやめてコンタクトにしたので、意外と美人だったことに気づいた。そのことは、直接本人に言わないことにしている。いまさら、照れくさいからだ。

ぼくの図書館への恩返しをする日は、かなり後になりそうだ。その時まで、キャラメルさんはいるだろうか。

ぼくは、時々、ミワの中にさえ、キャラメルさんがいるように錯覚することがある。キャラメルさんは、ずっとほくたちの近くにいてくれるような気がして、苦しいときも勇気がわく。

あとがき

冒頭の「真理がわれらを自由にする」は、国立国会図書館法の前文にある歴史家、羽仁五郎氏によるとされる有名な言葉です。

真理を実現するのは、幅広い知識と知性であり、直接、間接にそれらを形成する人格形成、特に読書活

動であると言うことはよく知られています。
この物語は、高校生を主人公にしていますが、人生をより自由に生きるためには、そのための継続的な努力が必要であり、中高校生の皆さんのために、特に、読書が若者を自由にするという言葉を贈りたいと思います。スポーツや、その他何にでも興味をもち、努力し、打ち込むことは大事です。そして、どんな時でも、本を手放さないでほしいと思います。
昔は、小さな町に、図書館というものはありませんでした。今は、望めばきっとそこにあります。図書館の本質は機能であり、使い方を知れば、生涯あなたの友達となり、師匠にもなります。映画「スターウォーズ」のジェダイのように、いつも、勇気や希望が若者の心にありますよう願っています。

この物語は、全てフイクションであり、ある夏休み前の二日間、小さな町の高校生三人がライラック町と言う架空の町の小さな図書館であるラベンダー畑図書館にインターンシップで訪れたところから物語が始まります。
物語の中の尻別川は、北海道磯谷郡蘭越町に河口を有し、今なお清流として知られる一級河川です。蘭越町は、尻別川水系の豊かな水と土の恵みにより有名な米どころです。その隣町には、ニセコ町が在り、物語の中の環状列石（ストーンサークル）もその町内の曽我地区に実在します。その他、スキー場として有名なニセコ連峰、蝦夷富士として知られる羊蹄山、さらに北後志の余市町、小樽市、余市町栄町のフゴッペ洞窟など一部、実在の名称を利用させていただきましたが、その他は架空の町や学校であることをおことわりします。

また、この作品は、「らんこし作家デビュー・プロジェクト」実行委員会の皆様のご協力、ご支援がなければ誕生しませんでした。心より感謝申し上げます。

翼のある人

２０１４年１０月５日　発行

著　者　母離　桜子

発行者　母離　桜子

出　版　らんこし作家デビュー・プロジェクト